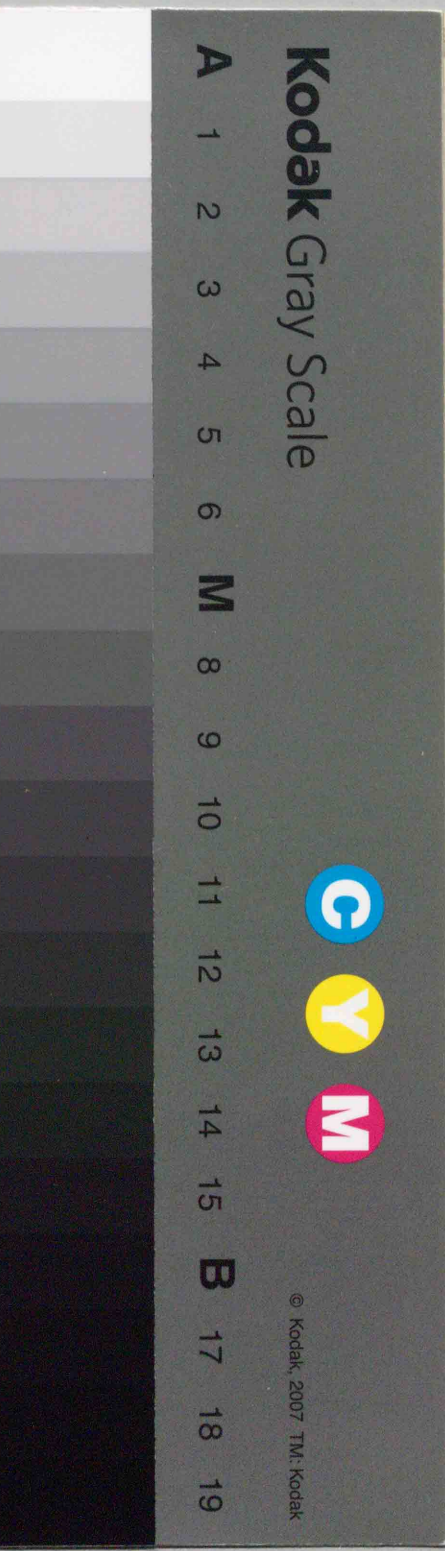
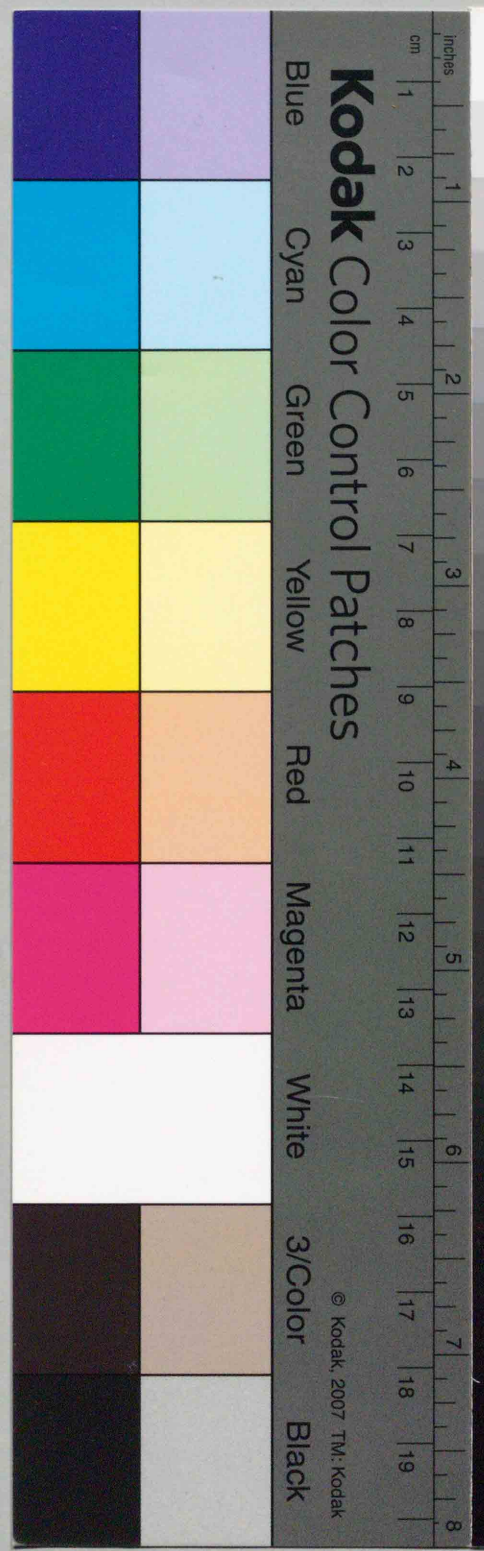


改新帝國讀本



卷一

3P5.9
HaP
資料室



41553

教科書文庫

4
810
41-1930
20000
47792



© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室
文部省檢定
昭和五年二月十四日
中學校國語科用

375.9
Ha7

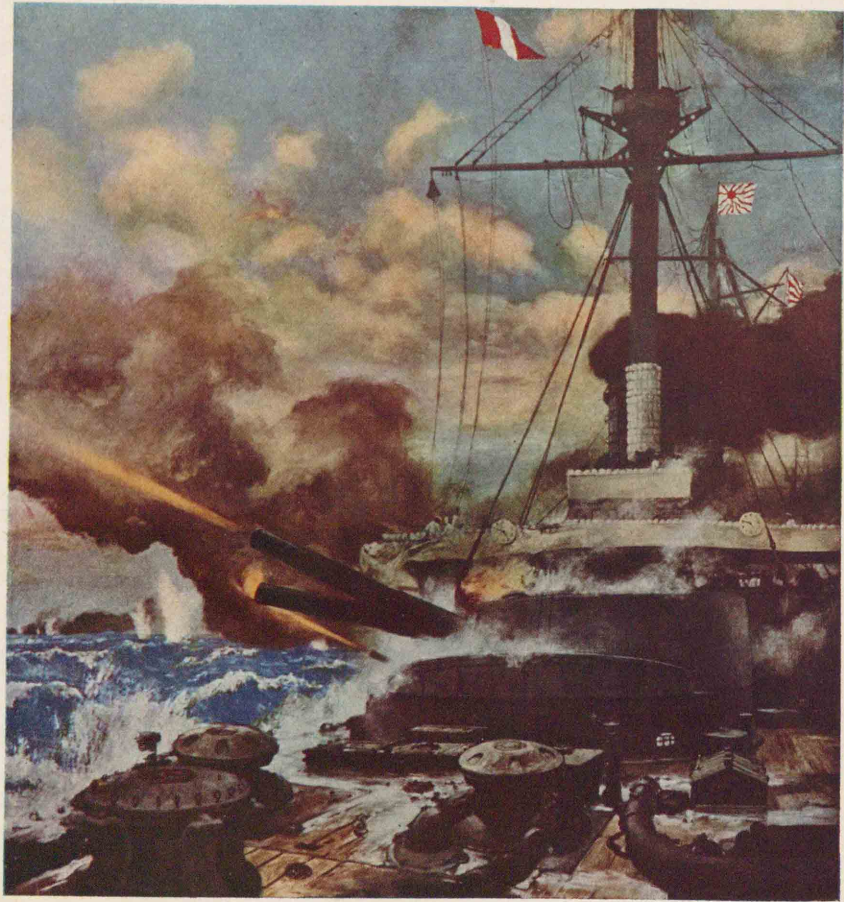
改新帝國讀本

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學士 長谷川福平 訂補

東京
合資
會社
富山房發兌

改新帝國讀本

東京
合資
富山房發兌



日本海之戰 中村不折筆



改新帝國讀本 卷一 目次

一	入學の春	一
二	櫻	五
三	今上陛下の御幼時	九
四	伊勢參宮	一九
	葉書だより(自修文)	二四
	一名古屋から	二四
	二京都から	二五
	三奈良から	二六
五	お遍路さん	二七
六	青葉	三三

七 一萬メートル……………土岐善麿……………五

八 日本海々戦に現れた我が國民性…小笠原長生……………四

九 ハワイ短信……………岡本綺堂……………五

一〇 朝鮮雜觀 その一…………………………五

一一 朝鮮雜觀 その二…………………………五

一二 古代に於ける日鮮の關係(自修文) 萩野由之……………七

一三 漸進主義……………八波則吉……………六

一四 伊能忠敬の晩學……………幸田露伴……………八

一五 親の愛の歌……………小林一郎……………六

一五 汝の母より……………姉崎正治……………九

飛行機(自修文)……………久米正雄……………六

一六 上高地遊記……………吉田絃二郎……………四

一七 私の村……………尾崎喜八……………三

一八 夕立……………徳富健次郎……………四

蟻(自修文)……………坂本四方太……………三

一九 男鹿半島……………加藤武雄……………四

二〇 七月の日記……………夏目漱石……………四

二一 波の花……………吉江喬松……………四

二二 膽力……………嘉納治五郎……………二

二三 座右の銘……………中根東里……………一

文章雜話(自修文)……………島崎藤村……………七

二四 秋を感ず……………三木露風……………一

二五 新秋の望……………近松秋江……………一

二六 松と大和心……………池邊義象……………一

二七 月雪花……………一九



改新帝國讀本 卷一

一 入學の春

長閑

幽谷を出でて
喬木に遷る

春は來れり。山の櫻は咲き、野の草は萌ゆ。遠山の雪は未だ消えざれども、小川のさゝやきは鳥の聲とともに長閑なり。新年を迎ふる喜にもまして喜ばしきは學年の始なり。まして今年のどかは小學校を卒へて、中學校にうつれるをや。幽谷を出でて、喬木に遷るといふ鶯にも似たるかな。學友の多くは舊知の人なれども、新しき友も半ばは交れり。新しき教科書を携へて校堂に上る嬉しさ。喜ばし、喜ばし。

つらつら

つらつら思へば、日本國の臣民と生まれ出でて、この大御代に遇へるは何よりの喜なり。世界の國々さまざまあれど、我が國史の如きうるはしき國史をもてるはなし。我が日本は建國の昔に君臣の分定まりて、萬世一系の大君代々相繼ぎて、仁慈の政もて民を恵み給ふ。君臣の間に父子の親みあり、一國は大なる一家を成せり。三千年の歴史を経て國勢はいよいよ盛に、今は世界一等國の班に入りぬ。日本臣民たる我等が心には、世界の人々の知り得ぬ誇あり、大なる喜あり。我が國は氣候溫和にして、四季をりをりの移り變りそれぞれに趣變りて珍しく、春は花、秋は紅葉の樂しき眺いづもつきず。山は青く水は清くして、山には早蕨さわらびを摘み、菌きのこをあさ

君臣の分

班に入る

趣

興

神往き魂飛ぶ

稱讚

る樂みあり、川には釣を垂れ、網をうつ興も多し。神々しき富士の山、繪の如き瀬戸内海、中にも日本の三景として世に知られたる陸前の松島、丹後の天橋立、安藝の嚴島、寫真にて見るだに神往き魂飛ぶ心地す。日本は世界の一大公園なりと、外國の人々も稱讚したりとかや。我が身を思ひ、我が家を思ひ、我が國を思へば、すべて大なる喜あり。青年の心には常にこの喜の絶えぬなるべし。いでやこの喜の心を以て、日々の學業を勉め、父母の



松島

慈愛、師の高恩、大御代の恩澤に報いまつらん。時は今春なり。
青年は人生の春なり。

時は今春、一年の春。

春の光は野山に満ちて、

目に見ゆるものすべてうるはし

時は今春、少年の春。

春の喜胸にあふれて、

志すことつねに新し。

花見る毎に叙こそ進め。

健たき身體いよいよ健く、

早も重ねん、五つの春を。

健し

二 櫻

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。ど
んよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない日和を花曇といつ
て、夜は照りもせず曇りもせぬ朧月夜。雲霞と紛ふ花には最
もふさはしい景色である。そよそよと面を吹くや春風。春の
特色はどこまでものんびりとした心持にあつて、きりつめ
たやうな激しさ、厳しさの少しもないところにある。櫻はち
やうどこの時の氣候にはぐくまれて咲出でる花である。際
立つた特色のないところが即ちその特色である。賀茂真淵
は

(一)「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の、おぼろ月夜に、おぼろくもの、なまき」(新古今集、大江千里)

はぐくむ

(二)江戸時代の國學者、明和六年(一七九九年)歿、三十三



櫻

吉野 森月城筆

二 櫻

にほひ出つ

うらうらとのどけき春の心より
 にほひ出でたる山ざくら花
 といつた春の日は永い。

名取花

ひさかたの光のどけき春の日に
 しづ心なく花の散るらん

蹟筆紀知田八



狩櫻の野交
 (筆實氏田前)

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。ここに大宮人のゆつたりとした優

(一)平安時代の歌人紀友則の作
 「櫻の花の散るをよめる」と題して「古今集」の部に
 あり
 ひさかたのしづ心
 大宮人

六

(一)奈良時代の歌
人山部赤人の
作。新古今集
春の部にあり。
も、しきの

牛車
黄昏
さながら
繪巻物



上野の櫻

美な様子なども思ひ浮かべられる。

も、しきの大宮人は

いとまあれや櫻かざして

けふもくらしつ

牛車の歩みおそく花見て歸る黄昏

の景、さながらの繪巻物である。

よしの山霞の奥は

知らねども見ゆるかぎりは

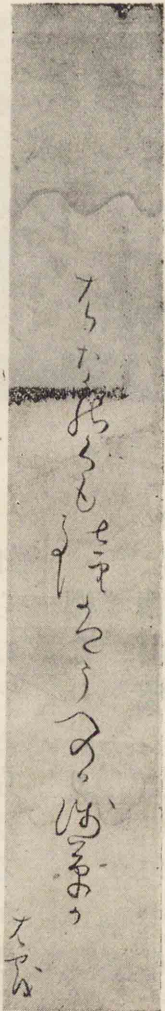
櫻なりけり

これは満山櫻の雲に包まれた吉野

山の風景を詠んだのである。

(一)俳人松尾芭蕉の句。

はなのくも鐘は上野か浅草か



蹟筆蕉芭尾松

これは大都會の櫻の花に蔽はれた光景である。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を愛賞する花ではなくして、木として愛賞する花である。否、多くの木を集めて、人はたゞ花の中に在つて愛賞する花である。下に見て愛賞する花ではなくして、上に眺めて愛賞する花である。春風四月、日本人はすべて花の中の人となるのである。

三 今上陛下の御幼時

(一)石井國次

(一)教育家。學習院教授。今上陛下御在學當時は初等科主事と御指導申し上げた令徳

抜群

徹底的

今上陛下の御令徳多くおはす中にも、第一に驚き奉るのは、御記憶の抜群にあらせられることであります。學習院で今まで多くの生徒に接してまゐりましたが、陛下のやうに御記憶の強い方は、見受けたことがありません。蟲の名でも、貝の名でも、聯絡も系統もないことまで、一度御覚えになつた以上は、決して御忘れになるといふことがありません。この御記憶の抜群な上に、御研究心が非常に御強く、何でもよい加減にして置くことが御嫌ひで、詳細に御質問になり、また御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へ

三寶

觀察

理解



(端左)下陞の時當學通御院習學

ば、歴史で聖徳太子のことを申し上げると、御歸りになつてから参考書を御調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふことかと御研究になる。理科で蝶の御話を申し上げると、蝶類圖説を御調べになつたり、盛んに御採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御觀察になる。或は電氣の御話を申し上げれば、種々な器械を御取寄せになつて御實驗あるといふ風であります。旅行、登山の御趣味も豊富にいらせ

られ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記をよく御調べになり、その産物や、動物、礦物から氣象のことまで熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識が確實で、且つ深みのあらせられることは、實に驚歎し奉る外はありません。

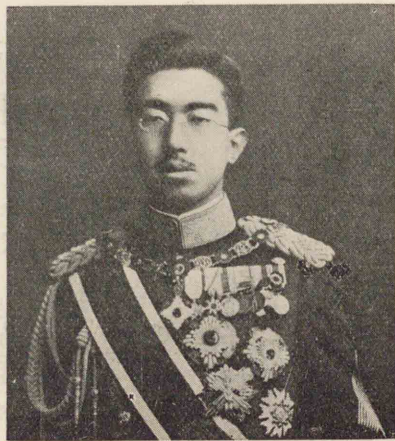
明治神宮に参拜して、^(一)明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀したものは、誰でもその御質素なのに感泣しないものはないと思ひますが、陛下もまたその御遺傳のせいか、御感化のせいか、御生來贅澤が御嫌ひで、いらせられます。それですから御學用品なども、全く一般學生と同様なのを御用ひあそばされ、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷺印のを

(一)東京府豊多摩郡代々幡町代祭神は明治天皇と昭憲皇太后
(二)第二百二十二代
調度品
遺傳
感化

(1)Gum.

裨益

好んで御使ひになり、しかも、それが非常に短くなるまで、決して御捨てになりません。消⁽¹⁾ゴムも當時四五錢くらゐなもの、を、豆粒ほどになるまで御使用になり、御帳面でも、半紙や



書用紙でも、決してむだにはあそばしませんでした。それで大正三年三月陛下が初等科を御卒業あ

上 陛下が初等科を御卒業あ
下を一般兒童に知らしめたら、さぞ國民教育に裨益するところが多

からうと考へて、陛下の御使用になつた背囊、教科書、雑誌、筆入から、帳面、鉛筆、ゴム、その他陛下が御製作になつた手工品

(1)東京市京橋區。
(2)同日本橋區。

(3)Ribbon.

圖畫、標本などを拜借して一室に陳列し、御教室や御控室などすべてを公開して、一週間市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。その時、毎日何千といふ兒童が、校長や教員につれられて参り、私どもは手分をしていろいろ説明をいたしたのであります。たしか、京橋か日本橋⁽²⁾あたりの學校と思ひますが、女の子で可なり綺麗な服装をして、幅の廣いリボン⁽³⁾などを着けて來た一組がありました。私がその女生徒たちに説明をしてから、皆さんは陛下さへかやうに御質素であらせられることを拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンなどを家庭でおねだりができないでせうね。といつたら、感激して、大分泣いた生徒がありま

した。
陛下はまた非常に規律正しいことが御好きでいらせられます。朝の御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御入湯、御寢まで、實に規律正しい一日の御日課を御守りになつて、御變更なさることほめつたにありません。随つていろいろなことをあそばすにも、すべて規律正しい計畫を立てて、組織的にあそばすといふ御性質であらせられます。
それから陛下は公平無私な御方であらせられます。例へば、戦争ごつこをなされたあとで、私はその審判をして、勝敗をきめ、講評などをする時に、御自分の方に不利なことであつても、決して御隠しなさらずに、御申し出になる。角力で陛

組織的

公平無私

講評



攝政宮時代の今上陛下

下が相手を投げられて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣付かなかつた少しの踏切でも御自分にあると、「これは私に踏切があつたから負であります。」と御主張になる。審判官や行司が少しでも不公平な審判をすると、非常に御嫌ひになる。仲間のものが、「その方が都合が好いではありませんか。」などと申しますと、「そんな不正直なことはいけません。」と仰せになる。御判断に決して私心を挟まれない。それで、歴史上の事實を御批判な

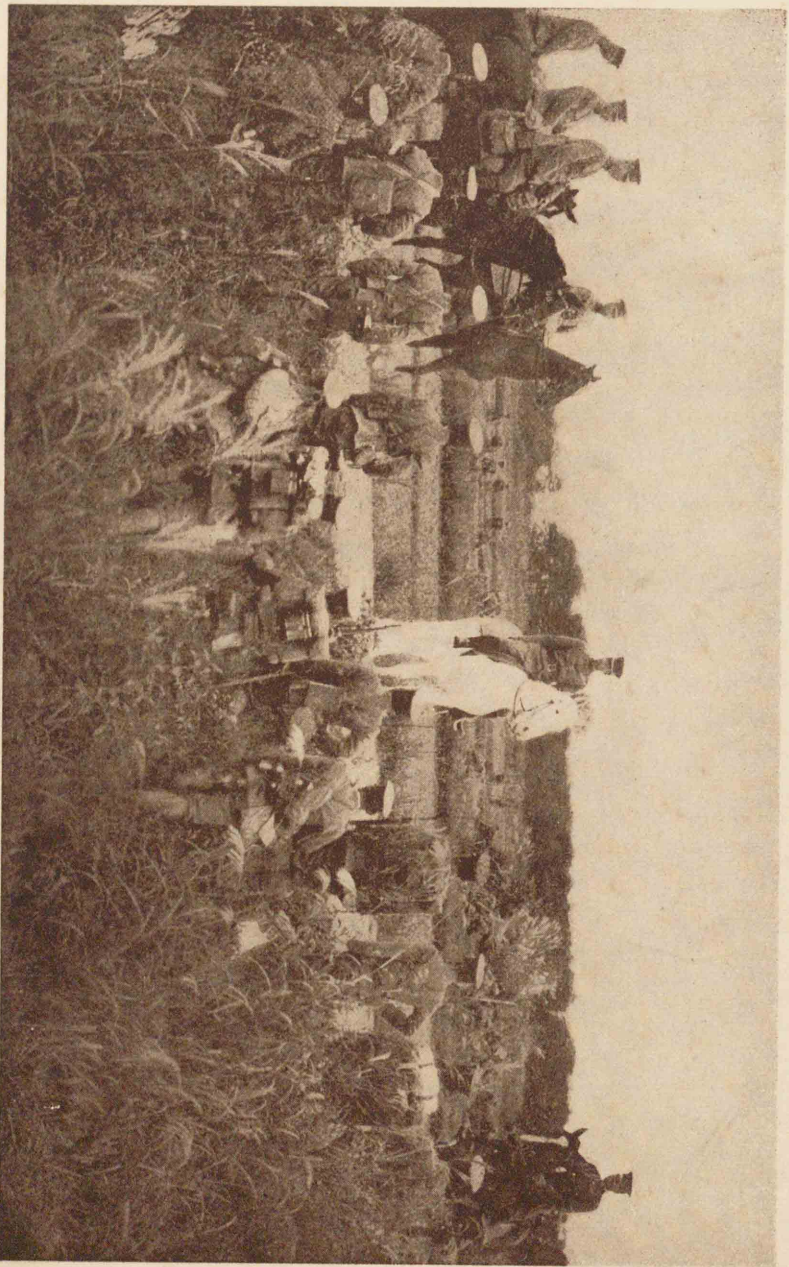
私心を挟む

批判

理路井然
大局から斷案
を下す

さる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案を御下しになる。實に陛下の御心は、さながら少しの曇もない明鏡であらせられます。それ故陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと寫し出されて、少しも隠すことができないのであります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少い方で、御世辭などは仰せられないが、まことに思遣の深い御方であらせられる。随つて御幼少の時分から、普通の子供にありがちな、友だちをいぢめるとか、意地悪いことをなさるとかいふやうなことは、決してありませんでした。そして友だちに對しても、御側のものに對しても、好き嫌ひとい



大御所習ふる今上陛下下

一視同仁

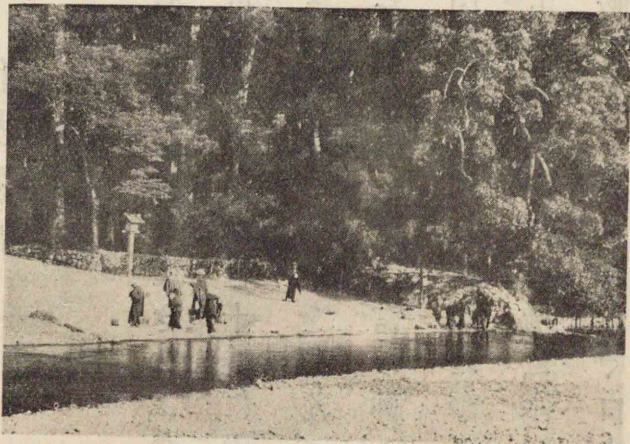
ふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従や侍従武官などに對しても、新舊の區別なしに、優しく御接しになるさうです。しかも舊いものをいつまでも御忘れにならずに、元の侍女だの御學友だのが御伺ひ申しますと、大變に御喜びになりますし、また時々御召もあります。私どもにも無論その通りで、御誕辰やその他の御祝にはきつと御召があり、御機嫌伺に出れば御喜びになつて、特別に拜謁を許され、御暇の時はいつまでも御引止めになつて、御話し下されるのであります。先年御外遊の時には、私はロンドン^(一)やパリ^(二)で御迎へ申し上げましたが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも先生先生と仰せられるの

拜謁

(London.

(Paris.
陪食

ぬ鳥の奥深く鳴く音に耳を澄ましつゝ、緑青色の苔に寂びた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立並んでゐる間をたどつて暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に千木、堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで塀の内に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に揺られ、その奥にまばらに立つた神杉に護られて、御白石のびつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜ま



川 鈴 十 五

千木
堅魚木

拍手

(一)もとは武士であつたが、十三歳の時、僧と成り、諸國を行脚した。和歌をよみ、建久元年(一一八五年)歿。年七十三。

(二)「何事のおはしますか、は知られども、は知らず」に涙こぼる。

額づく
敬虔
大廟
單純

れます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。さうして傍に並んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聽入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた、敬虔な姿を思ひ浮かべました。

直き清き強き心をあらはして

すくすく立てりたふと神杉

大廟は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。さうしてこの御社の神杉は、樹木の神々しさを極度に表したもののやうに思はれます。

私どもは内宮の御後の神杉の根方から、一片の苔を採つ

幽寂
雅樂
神境を辭す
一五十鈴川に
ひる

二明治天皇の皇
后。大正三年
四月十一日崩
御年六十

愛で聞し召す
三神路山の東北
山上に朝熊神
社がある。眺
望雄大。

四内宮の神境を
めぐる鬱蒼と
した山林

いはれ

五三重縣度會郡

て、押戴いて懷にし、御手洗川に口漱いで、折しも聞える笙、
築の幽寂な雅樂の音に送られて、神境を辭しました。そして
かへりみかへりみ宇治橋を渡つて、昭憲皇太后の愛で聞し
召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、
田圃路の五十九町を志摩境の名山朝熊岳に走らせました。
御社のうしろの御門をろがみて

ひとかけの苔をいただき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を
車に搖られながら、私はこの神境が大神の大御心になつ
たいはれを考へました。大神宮儀式帳に、

度會の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、浪の音

聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御
意鎮ります國と悦び給ひて、大宮定めまつりき。

とあるのを見れば、第一には、山水の景色のたぐひなさを愛
でさせられたのであらう。第二には、地勢、氣候、風土のうるは
しさを愛でさせられたのであらう。第三には、この土地に永
久な平和の可能性のあることを愛でさせられたのであら
う。最後には、一切の消極的煩累に煩はされずして、皇御孫に
率ゐられる大和民族の積極的、光明的發展を見そなはずに
都合のよい氣の落着く境と思はせられたのであらうなど
と考へながら、をりをり車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中に、
いつか朝熊岳の麓に着きました。

—我が書翰—

可能性
消極的
煩累
積極的
見そなはず

饒舌

(一)文學士(國文) 明治五年(1874)生まれ 川縣に生れた 著 草十講の徒然 評釋等自然 がある

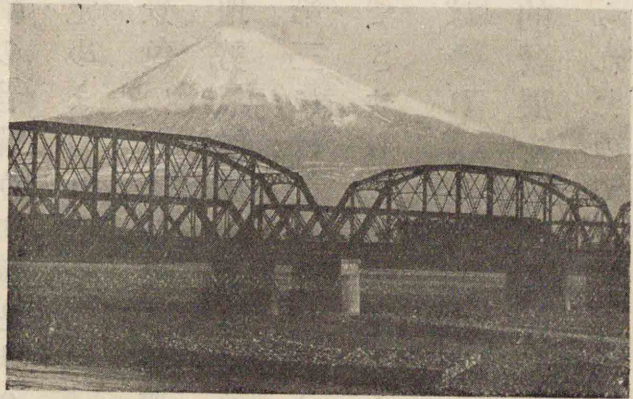
自修文

葉書だより

一 名古屋から

けさ五時十分の東京驛發でいよいよ修學旅行の途に上りました。右には富士山、左には駿河灣を、春霞の淡い中に眺めながら通りました。時には、實に愉快でございました。いえ、そればかりではありません、見るもの聞くもの、旅では皆珍しく新しく、愉快でございます。

今名古屋に着きました。夜に入りましたので、金のしやちほこはまだ見ません。

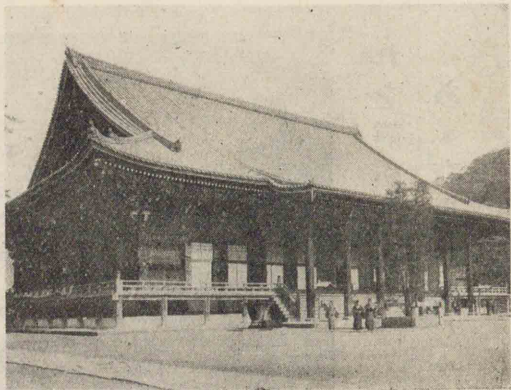


富士

内海月杖

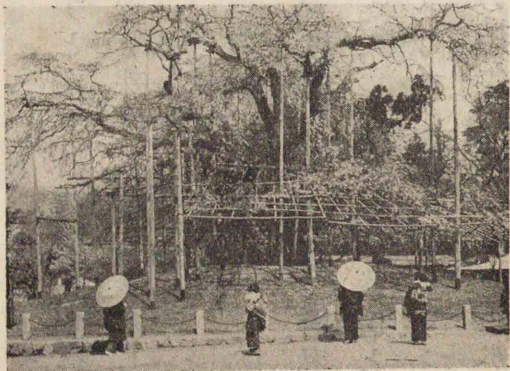
(二)名古屋の天主閣上に飾つてある

(一)金閣寺。京都北山の建てたもの。寂びた庭にふるび何となく静かな庭。閑寂ものしづみ。(二)京都東山華頂山の麓。浄土宗の本山。(三)今は圓山公園の一部となつてゐる。(四)知恩院の南に接してゐる。(五)所謂祇園の櫻。京都東山の一峰。昔この地についたのが名となつた。(七)圓山公園の中に在る。極彩色。極めてこい。精密な彩色。



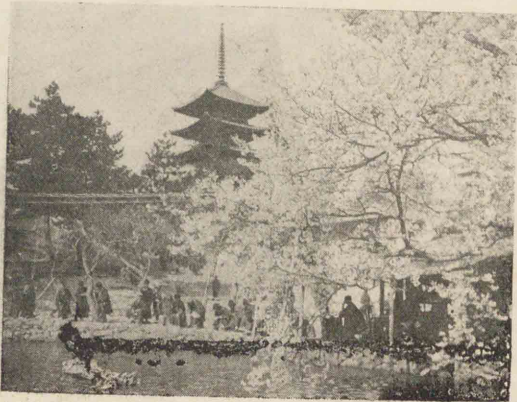
(一) 京都から 二 金閣のもの寂びた庭に限りなく閑寂の趣を味はひ、さて、知恩院から眞葛が原を過ぎまして、今圓山公園の垂絲櫻の下に休んでゐます。(六) 華頂のこんもりとした森の彼方から、長樂寺あたりの

らしい鐘の音がわたつて来て、都人の極彩色の長い袂に、夕暮の春風が暖かく訪れます。花がちらちら散ります。あゝ、京都はほんたうに繪のやうでございます。



圓山公園

三 奈良から



猿澤の池

奈良に來ました。京都を繪だとし、ますと奈良は詩でござい
す。その詩の趣を殊にし、みじみとしの
ばせて、今音も立てぬ雨がしとしと
降りくらし、てゐます。猿澤の池も見ま
した。大佛も見ました。しかし一番私の
心を引きましたのは、俗に三笠山と呼
んでゐる若草山でござい、ます。ふつく
りとした山の中腹に、二三本の松が立
つてゐ、まして、その下の一面の若草の
上に、例の鹿が群れて遊んでゐます。そ
れを靜かな雨がぼかしてゐます。
あゝ奈良はほんたうに詩そのまゝでござい、ます。

(一)興福寺の南の
屋の下池邊
に柳が多い
(二)東大寺の中堂
の本尊高さ
五丈三尺五寸
(三)奈良の東方春
日山の北の小
生春一面の芝
は春日山、高
圓山、若草山
の三つを合さ
せると三笠山
といふたやう
である

(一)俳人名は藤
吉。明治十七
年。東京市七
味。屏光。自
味。井。泉。明
話。山。氷。巡。禮
等。著。わ。あ
山莊

(二)僧の空海。
和二年(一四
九五年)三月
二月一日入寂
喜年六十二
弘法大師の諡
號を賜はつた
遍歴

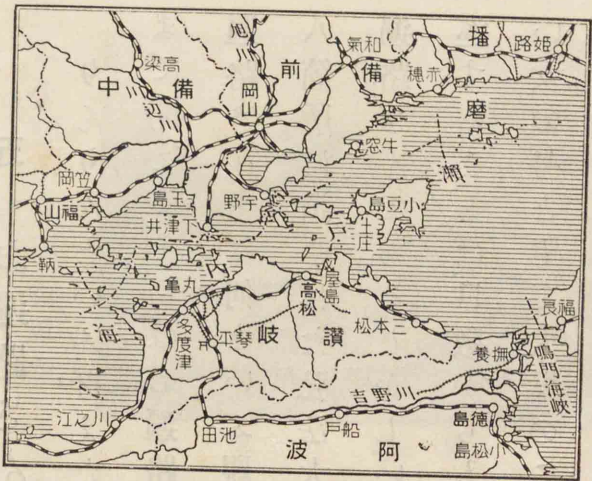
(三)香川縣大川郡
大串崎の北方
海中
功德

五 お遍路さん

荻原井泉水^(一)

りんりんといふ^き牙えた音が、遙かの山裾からこの山莊に
まで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。――お
遍路さん。とは、何といふ親み深い言葉だらう。――四國八十
八箇所^(二)に遺された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのがお
遍路さんである。しかし、いかに信仰の爲とはいへ、四國を一
巡することは、日數からも、勢力からも、殊にお遍路さんに多
い女の身として、大抵のことではないので、四國の代りにこ
の^(三)小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德
を積得ることとされてゐる。島四國。といふ言葉もできてゐ

(一)岡山縣岡山市
山陽線鐵道の
要驛
(二)香川縣高松市
(三)小豆島第一の
都會。岡山か
ら十八哩。高
松から十二哩。



る。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふことである。多くは岡山から若しくは高松からくるお遍路さんは、船で土庄港(土庄)に着く。そこから發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路をたどるのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖をもつて、寂しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴

先達

びながら、海の近い麥畑の中の道をたどつて行く。それは繪である。美しいことである。この山莊にまで聞えるりんりんといふ冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に路を歩くに好い氣持であり、また農事も比較的閑な四月頃に一番多く見受けるといふことだ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡してくる。一體遍路といふものは、いつ頃から始つたものか知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信念を厚くする上からいつても、まことに好いことだと思ふ。そればかりではない。お遍路さ

教門

んは到る所で愛せられる。また恵まれる。お遍路さん同志も

扶助



遍路

またお互に遍路であるといふことの爲に信頼する。また扶助する。これが實に好いことだと思ふ。未知の人たちが連になつて親しんで行く。路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふことだ。これは、遍路としての誰もが、一つの眞實の

眞實の道

讃仰 欺瞞

道に繋がつてゐるといふ意識からくるのだ。この道に参するには、知識も、修養も、資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも、娘でも、男でも、子供でも、たゞ一つの道を信ずることによつて、この尊い心持に一致することができるのだ。南無大師遍照金剛」と讃仰する聲が出てくるのだ。これは實に美しいことだ。争鬭と欺瞞との満ちた社會の中にあつて、信頼と扶助とに心を合はせてゆく。美しいことが他にあらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふことに生きるが故に美しいのである。そしてこれは獨りお遍路さんの上のことだけでは

魅力
有田中...
人...
...
...
...

青葉につまられた家々よ
見馴れた家々も
一層親しみ深くなつた
幸福な思をつゝんで
静もつてゐるやうだ

青葉の蔭の小徑よ
歩き馴れた小徑も
新しい喜び盡きない魅力を秘めて
私を誘つてゆく
どこまでも

寄 藤 天 二

(一) 歌人、東京朝
日新聞社調査
部長、明治十
八年、東京市に
生まれた。篤
の明、萬物の
世界の縁の著
が、あ等多く
ある。

おゝ青葉青葉
揺れ輝き
あふれる青葉
明るい五月の空に
軽やかな青い翼よ

七 一萬メートル 土岐善麿

三周... 四周...
その頃から選手の間隔が著しく違つて來た。
東西對抗の陸上競技も今年は第五回で、その決勝に出席
すべき選手たちの意氣は、關西も關東も猛烈で、新しい記録

(一)metre.
(二)track.
(三)hurdle.
(四)relay.

が期待された。この一萬^(一)メートルも、今年からはトラ^(二)ックで行はれることになつたから、観衆はひと目に選手の力量、技巧、並びに作戦を大観することができ、四百メートルのハード^(三)ルや、千六百メートルのリレー^(四)などと共に、トラ^(二)ックの新しい興味になつてゐたのである。

(五)start.

何しろ一萬メートルといへば、里程にして約二里半、四百メートルのトラ^(二)ックを二十五回まはらなければならぬ。一人でゆつくり驅けるさへ、いや歩くさへ一通りではないのに、一着、二着を争つて多數と競走するのである。選手連の日頃の練習も思はれて、スタートと共に、晩春の風冷たき神

(一)stand.

宮外苑^(一)スタンドはどよめいた。



(二)style.

長距離なので、百メートルや二百メートルなどのやうにスタートの息づまるほどの緊張さはないが、數も^(二)多く、スタイルも思ひ思ひ、色さま^(二)も多くな賑はしさで、選手は各自その競^(二)ぎざまな賑はしさで、選手は各自その技^(二)練習の程度と姿勢とを守りつゝ、快^(二)場走する。

その中に一人、へうきんな赤帽を冠つて、顎にちよびひげを生じた選手がゐた。地方の青年團の一人であつた。スタートの時から

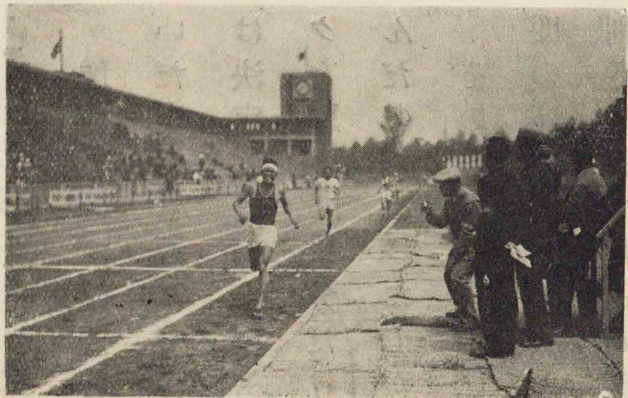
愛嬌

まつしぐら

いち早くその風體が觀衆の目をひいて、競技場の空氣に一種の愛嬌をつくつた。が、彼は十周ぐらゐるから、いつか先頭の選手より一周近く遅れてしまつた。一人へは、審判員が審判臺のあたりへくる毎に、回数をするした紙をめくつて、あと何回と呼びかける。これが選手を一層元氣づける。あゝ、一周、一周と減つてゆくその回数の痛快さよ。しかし、一周遅れた選手に對しては、なほその一回だけを多く呼びかけられることはいふまでもない。そのたびに赤帽の選手は、にこにこ審判員に微笑を投げつけて通過する。そしてまつしぐらに走路をたどる。最初スタートの線上にあふれるほどであつた選手も、一

落伍者

拭ひもあへず



人また二人、青空に吸はれたか、大地に沈んだか、その影を消

してゆく。さういふ落伍者のある中に、遅れても最後までと、彼はねばり強く、兩脚の筋肉に青春の意氣をみなぎらせつゝ、額の汗を拭ひもあへず、しかも悠々と、急がずあせらず、一周、一周とトラックの土を踏みかた

ければ、さながら先頭を争つてゐるやうにも見える。あつた選手も、一

檣上に翻つたのは實にこの時であつた。抑日本海々戦は彼我海軍主力の殆ど全部をもつて對抗したもので、國家の運命實にこの一戦にかゝつてゐたのである。随つてその戰場區域も甚だ廣く、東西約百八十浬、南北約二百浬にわたり、合戦は二十七日の晝戰、同夜戰、二十八日の晝戰と三段に大別せられてゐる。而してその結果三十八隻の敵艦中、十三隻は或は沈み或は降伏し、ともかく遁れ得たのは軍艦一隻、驅逐艦三隻、特務艦一隻に過ぎないのに、我が艦隊は僅かに水雷艇三隻を失つたのみであつた。



東郷元帥

光明面

(一) 陸軍大將秋山好古の弟、當時は海軍少佐、五十七年歿、年大

(二) 子爵。元帥海軍大將、兼政治家、友三治、當名は海軍少將、大正十三年歿、年六十三

かくも重大な關係をもつた大激戦であつたから、その間には忠烈な場面、悲壯な場面、仁愛の場面、義侠の場面、人情美の場面、劇的場面等、善に高鳴る人間の光明面と申すよりも、皇國國民性の本領が遺憾なく發揮せられてゐる。更にこれを言換へると、智仁勇の三つがいかにも見事に織込まれた大和錦が世界の前に展開せられたのであつた。開戦は一秒一秒まつて來た秋山參謀は從來の戰鬥に鑑み、東郷司令長官の身上を心配して、切に司令塔内に入るれるやうに勧めたが、長官は承知しない。永田副官も勧めた、加藤參謀長も勧めた、しかし長官は好意に對する感謝の色を浮かべながら、斷乎としてこれを謝絶し、反つて春秋に富

幕僚

む幕僚等に入ること勸めたといふ溢れるばかりの人情

美をもつて海戦の幕は開かれたのであつた。

三

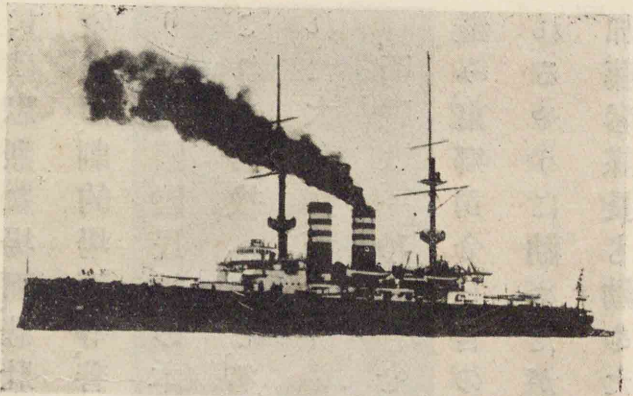
敵前に於ける大膽なる旋回運動によつて、まづ勝利の地歩を占めた

笠

我が各戦隊は或は正面より或は側面より、一離一合、一進一退、獨斷的統

艦

一の妙を恣にし、晝間の正戦から夜戦の奇襲に移り、更に翌日正戦に復して全捷を得、降服將校に武士の面目を保たしめたと、撃沈せる敵艦ウシャークフの乗員救



助を最後として、戦鬪は終りを告げたのである。

ウシャークフ乗員の救助については、まことに美しい話が當時の記録に記されてゐる。

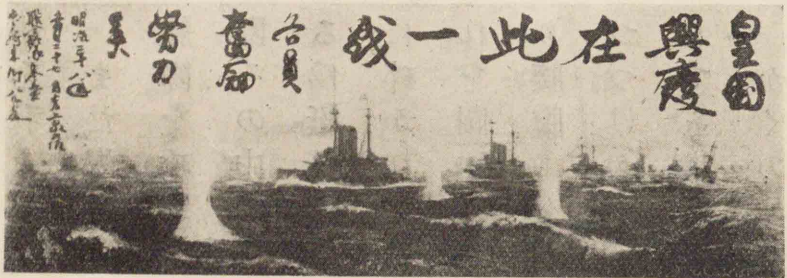
「敵の溺者を救はんが爲、八雲の端艇まさに本艦を離れんとするや、艦内にある兵士たちは、そのむくつけき口々より優しくも『皆救うて来てやれよ』と叫び、ついでまた敵兵等波間に漂ひ來るや、磐手、八雲の兩艦の兵員悉く舷側に出で、或は綱を投げ、或は木片を流し、かくして敵兵を艦上に助け上げ、慈母の子を勞はる如く、衣服を與へ食物を分ち、懇切を極め、敵兵三百三十九名を救ひ得たるが、しかも兵員自身の仁愛より發したるもの多く、これを目撃せる我が將校はその

優しき心に覺えず感涙を催したり。狭氣と同情とに富める我が國民性は遺憾なく發揮せられてゐるではないか。

なほそのほか、軍艦松島では數裡にわたる敵の大艦隊と接觸を保ちつゝあるの際、艦長は將士の覺悟をためさうと、琵琶に堪能なる軍醫をして、撥音高く川中島の一曲を彈ぜしめて見たところ、兵士等は平常にも増して懸聲勇ましくこれを聽いてゐたので、艦長はいひ知れぬ頼もしさを覺えたといふことで、敵前琵琶の一曲として、今もつて海戦に於ける語草の一つとなつてゐる。

(Must)

また旗艦三笠では、激戦中敵彈の爲、檣(マスト)の尖が折れて、そこ



に掲げられてゐた軍艦旗と、東郷司令長官の大將旗とが落ちた。いふまでもなく、かかる際に大將の旗が落ちるといふことは、非常に士氣に關係するもので、幕僚や艦長は我知らず「あなや」と叫んだほどであつた。するとこの時、檣樓の上(マスト)にゐた下士卒は豫て自分たちの考から、かういふ場合を慮つて、軍艦旗と大將旗の豫備をもつてゐたので、直ちにそれを引上げたのである。この一事は職務に忠實な者は賢愚を超越して必ずや注意周到になるものだといふ生きた教

訓を我々に與へてくれてゐる。

また海戦當日の初夜、我が驅逐艦、水雷艇隊が盛んに敵の艦隊を攻撃して、我が三隻の水雷艇が悲壯な最期を遂げた際、その中の第三十四號艇の一信號兵は僚艇に危急を告げる爲艇長の命により發火信號をしてゐる時、艇は更に敵彈に碎かれて、一秒一秒沈没し始めた。しかし信號兵は更にこれを關知せざるもの如く、自若として職務をつづけ、足より腰、腹より肩と次第に水中に没しつゝも、なほ發火信號をつづけ、かくてこの忠烈な信號兵は艇と運命を共にした。而してそれが爲僚友の多數は僚艇に助けられたのである。かくの如く數へ來れば、枚舉に遑あらざるほどの美談が

あるが、更にこの海戦を背景として我が國民の品性の高いことを最も明白に證據立てた一話がある。

海戦後間もない時であつた。世界第一の紳士國をもつて自任してゐる某國の武官が、我が幕僚の一人に向かひ、先年自分の國が征討に向かつた某戦役では、軍機の漏洩がどうしても防がれず、實に困つたが、貴國ではいかなる措置を取つて、かくも見事に祕密が保たれるのか不思議でならぬといつた。外人が不審がるのももつとも、我が聯合艦隊の全部は、三十八年の一月から五箇月の長い間、朝鮮海峽に據つてゐたのであるから、或程度までは各新聞社等にもその消息は判つてゐたやうであつた。それにも拘らず、一行もこれ

に關する記事を掲載した新聞はなかつたのである。この一事はいかに我が國民の品性が國家の大事に當つて向上せられるかを證したもので、眞實の舉國一致であると、限りない床しさと頼もしさを覺えたのである。

東郷元帥は皇國の興廢この一戦にあり、と部下を激勵せられたが大觀しくすると、我々國民一同が皇國の興廢は自己がそれぞれの職責を盡くすと盡くさざるとに因るとの覺悟をもつて、常に業務に忠實であつたなら、直接なり、間接なり、外國との平和的競争に大勝利を得られることの日本海海戦と同様なるべきは、私の確く信じて疑はざるところである。

大觀

九 ハワイ短信

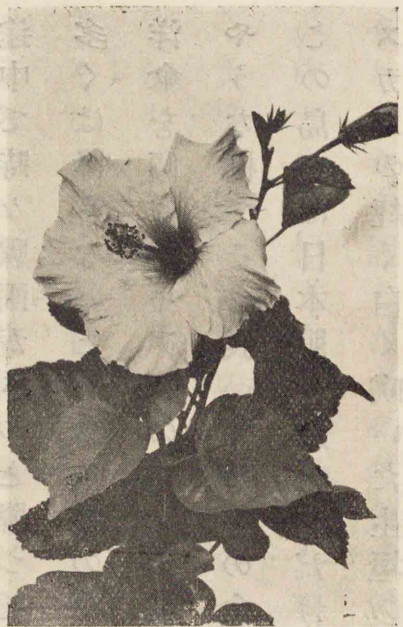
岡本綺堂

午後一時頃宿を出て、ヌアアヌの古戰場へ向かふと、その途中で時々驟雨がさつと降つてくる。これがこの島の習で、多くは降らないといふ。白地の單衣を着た日本の娘たちが洋傘を傾けて、キアベの樹の下を縫つて行く。キアベは柳のやうな樹で、その長い葉が娘の傘の上に濡れて靡いてゐる。この島では、日本服は婦人にだけ許されてゐるので、ハイビスカスの紅く白く咲いた生垣のほとりや、キアベの青く垂れてゐる樹の蔭に、長い袂がちらちらと揺れて見えるのも、何となく懐かしく思はれた。驟雨は忽ち晴れて、明るい日の

(一) 戯曲家。名は敬二。明治五年東京市明生町に生れた。七部集。脚本集。随筆等。著者がある。
(二) Hawaii。太平洋中にある十餘の群島。最大島ハワイは二四〇〇方哩。
(三) Nuuanu。ハワイの首府ホノルルの北方約五哩にある味。
(四) Kialoe。豆科の喬木。實を牛馬の飼料とする。
(五) Hibiscus。木芙蓉科の喬木。ハワイの國花。

人を弄ぶ

西暦一七九五
年四月新たな
移住民を破つ
てハワイ統一
の基を定めた。



スカスピイハ

光が草花の露を照らしたかと思ふと、またどこからか霧のやうな雨が畑つてくる。晴また雨、雨また晴、人を弄ぶやうな南國の空を仰ぎながら、自動車が町はづれからだんだんに坂路を上つて行くと、幾曲りした坂の頂上に、雄大な繪巻物が突如として展げられた。

私たちが今立つてゐる坂路の頂上は古戦場である。ハワイの歴史について殆ど何の知識ももたない私は、西暦千七百九十五年、カメハメハ第一世がそこで大いに敵軍を破つ

歴史的感興

そ、り立つ

一代の英主

險要を扼す

おめおめ

たといふ事蹟を聞くに過ぎない。随つて十分に歴史的感興を喚起することのできないのを甚だ遺憾とするが、見るところ百尺の斷崖が斜にそ、り立つて、その裾は大きな海の方へ開けてゐる。この時代のこの島國の戦闘は、石の鏃を飛ばしたり、焼石を投げたりしたと傳へられてゐる。カメハメハ第一世も勿論一代の英主ではあつたらうが、この險要を扼して待受けられては、大抵の敵もおめおめ撃退されるより外はあるまい。この名



ヌアアヌ古戦場

颶風

物は古戰場といふ以外に、非常に東北の風の強いことである。海から吹上げてくる風の勢の凄じさは、さながら颶風の



カメハメハ第一世

やうで、油断したら帽子はおろか、自分のからだも吹飛ばされてしまひさうになる。けふは近來珍しい静穩な日である。このことであつたが、初めて登つて來た旅人に取つては、決して静穩ではなかつた。わたしは幾たびかよろめきながら、僅かに自動車の蔭に隠れて、この凄じい風の手につかみ去られるのを免れた。カメ

叱咤號令す

〔Waikiki〕
ホノルルの東
南方

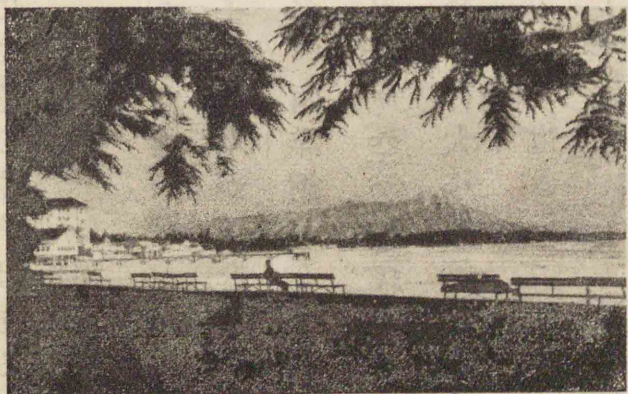
坦々

ハメハ第一世もこの風の真中に突つ立つて、身方を叱咤號令したのであらう。それだけでも彼に英雄の資格はがあると、私は更に彼を尊敬する氣になつた。

吹飛ばされない中にここを立退いて、ワイキキの方角へ自動車を走らせて行くと、棕櫚や椰子の並木が路を挟んで大道坦々、その間には庭の廣い、花の多い西洋館が、そここに見える。驟雨はもう通り過ぎたと見えて、空の瑠璃色はいよいよ明るくなつた。その空を彩るやうに、大小の虹が遠く近く懸つてゐる。虹はこの島の名物の一つであつて、月夜にも虹の出るのは珍しくないとのことである。島の人が世界一を誇る水族館は、案外に小規模なもので

はあつたが、色彩の美しい魚類ばかり集めたといふのが、恐らく彼等の誇であらう。ここにも日本の金魚や緋鯉が見出された。水族館を出ると、例のキアベの枝に涼しい風がそよそよと流れてゐる。

夏冬の區別のない海水浴場を見物して、再び椰子や棕櫚の間を潜つて出ると、自動車はいつか支那町へはいつて、更に日本町を一巡する。そこには湯屋も、理髪店も、鮎屋も、饅飩屋も見えた。ハワイは氣候の良い所で、夏もさのみ暑くない、



ベ ア キ

さのみ

樂園

生活の單調

冬も勿論寒くない。生活も他に比較すれば頗る安樂であるから、生活に疲れた諸國の人々が、一時の隠所^{かくれが}として尋ねて来て、ついそのまゝに腰を据ゑてしまふのが多い。日本人も移民を合はせて十三萬に近い。氣候も溫和、生活も安樂、まことに太平洋上の樂園でありながら、彼等の最も苦しむのは、生活の單調である。どこへ行つても人間の悩みは絶えない。その晩の歓迎會の席上では、みんなの口から同じやうなことが繰返された。

私はここに來ていろいろな果物を味はつたことを誇りたい。パイナップル^(一)やバナナ^(二)や西瓜のたぐひはいふまでもないが、その外には、マンゴー^(三)やパイナップル^(四)が旨かつた。アリ

- (一) Pineapple.
- (二) Banana.
- (三) Mango.
- (四) Papaya.

Alligator-Pear (鱷梨)

ゲーター・ペヤーなどといふ怖しい名の果物も食べた。

— 十番隨筆 —

一〇 朝鮮雜觀 その一

「ミカドの帝國」を書いたアメリカ人グリフィスは、朝鮮を「仙人國」と呼んだ。この仙人國も今は我が大日本の新領土となつて、一千餘萬の仙人も、皆我が新しい同胞である。仙人もだんだん俗人の仲間入をして、活動してもらはなければならなくなつたが、黒い冠を被り、白い衣を着て、悠然として市街を歩いてゐる朝鮮紳士の風采を望めば、いかにも仙人らしい様子が今でも見える。人毎に長い煙管を携へてゐるの

Griffs. 教育家。宗教御治四家教育の三年西曆一八つ雇の初年生。日本明た教師であ

優長

は、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、この長い煙管そのものが、優長といふ感を一層強からしめるのである。貴賤上下悉く純白な着物を纏うて、見わたす限り眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのではなく、冬でもやはり同じである。これには一つの傳説があつて、昔或時代の王様が、父王の死を悲しんで、始終白い服をつけてゐられたので、人民が皆これに倣つたのだといふ。一應聞けば尤もらしい殊勝な話であるが、この傳説は無論作事であらうと思ふ。どこの國でも古い時代には眞白な着物が流行るが、その中に、いろいろな染色や、縞や、飛白の衣裳が行はれる。文化の他の方面が種々に變化を受けたに

殊勝

萬事萬端崇拜す

も拘らず、純白な衣服が數千年の後までも行はれてゐるのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端支那を崇拜した國として、この國俗を變へなかつたことも、考へればおもしろいことである。

子供はをりをり桃色や萌

黄や、藍色の着物を着てゐる。

それも全部同じ色で、日本の

娘の子のやうに、美しい花紅

葉の染模様ではない。婦人も間々紅色、萌黄色の衣を着けて

ゐるが模様や縞は少しもない。殊に婦人が「長衣」といつて、我

がかつぎのやうなものを着て、目ばかり出して歩いてゐる



女た着を衣長

衣冠を正しくす

のは、日本の古代の風俗そのまゝで、服制に多少の相違こそあれ、大體に於て古い繪卷物を見るやうな心地がする。低い屋根の下でまくは瓜などを食べてゐる様子は、どこことなく今昔物語をまのあたりに見るやうである。現在の生活に於て、朝鮮人が優長といふばかりではなく、朝鮮の歴史そのものが優長で、今でもやはりそろそろと、昔の歴史が流れてゆくのではないかと思はれる。

衣冠を正しくすることは、確かに朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも、めつたに肌を露すことはない。これは寒い氣候の關係から、自然習慣となつた所以もあるかも知れぬが、とにかく素肌を人前には出さない。支那

の労働者も身體の上部こそ露せ、腰から下は出さないが、朝鮮人で肌を脱いでゐるのは、遂に一人も見なかつた。

朝鮮人は雨具を用ひぬといふことは豫て聞いて居つた。



俗風の流上

今は田舎でも蝙蝠傘かぶちりを手にして歩いてゐる人を見受ける。それよりも不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上(一)に小さい傘を載せてゐることである。竹の骨に油紙を張つたものである。なるほど日本の傘はこれを大きくしたものだなど感服した。また頭に雲水の被るやうな深笠の大きなのを被つて歩いてゐるのが往

雲水

(Turkey)

(Silk-hat
絹帽)

往ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は一年、二年、三年必ず常にあの笠を着けてゐるといふ。いかさま舊い禮儀のやかましい所だ。朝鮮、支那、トルコ(一)皆それぞれの被物を今も保存してゐる。日本人は古いものを保存してゐるが新しいものはなんでも用ひる。洋服に下駄も履き紋附の羽織(二)にシルクハットも被る。



けち

一一 朝鮮雜觀

その二

朝鮮人のものを運ぶのは、男は背、女は頭である。男の背には例の支繫ちけいといふものをかけて、一切のものをそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡瓜を賣るのにも背に負うてくるので、日本のやうに、天秤棒で両端に擔ぐことはない。すべてが山に柴刈に行く昔話の爺さん式である。女は洗濯物でもなんでも頭に載せて行くので、これは京都の大原女式である。しかし大原女のやうに張板や梯子などを頭に載せて歩くのは、見受けなかつた。



もの運ぶ女

に思はれるが、實際は少い。これは氣候のせいである。竹の簾や、扇子や、竹細工もいくらかあるにはあるが、概して日本のやうに竹を種々な工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹眞二つ割て天秤棒の代りにしたり、竹で船を作つたりしてゐるが、京城では竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見ると、大抵繩にかけわたしてある。また田舎などでは丘の上にひろげて並



京 城 市 街

べてあるだけである。桶、たらひのやうなものにも、竹のたがはない。竹のない所へ行くと、今更のやうに竹の効用の廣いに驚かれる。水道栓の側で水を酌んでゐる朝鮮人を見ると、ブリキの石油の空函などを用ひてゐるものがあるが、瓢箪をたち割つたのが水を酌む杓子であるのは、古風でおもしろい。

朝鮮人の履物は、男も女も一種の靴であつて、内地のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に足駄の齒のついたものがあるが、鼻緒を立てて、その鼻緒を足の指に挟んで歩くといふ藝當は、日本人より外にはできぬのであらう。

朝鮮の家はいかにも低くて、むさくるしく見える。京城に

(葦)

はさすがに瓦ぶきの家もあるが、田舎は殆ど藁屋ばかり。その藁のふき方が、日本の如く綺麗に端をそいでないので、ただ藁をうちかけたやうに見える。寒さを恐れる爲、窓が少いから陰氣で、日本の田舎家のやうにからりとして居らぬ。日本のは小さくても、汚くても、からりとおつ開いてゐる。あれでは夏はさぞ暑からうといへば、日が透らぬから割合に涼しいとのこと。床は土で、その下が濫突で、冬は火を焚いて暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には二階建、三階建を禁じたのである。それ故庶民の家は皆低い。また家を餘り立派にすれば金持と認められてすぐに課税されるから、金持でもわざと外觀を汚くしてゐたやうな原因もあらう。併合後新

庶民

築する朝鮮人の家には、だんだんと二階造の高いのもでき

るさうである。

それに比べれば、王宮は比較にならぬほど規模も大きいし、立派である。就中さきの王宮景福宮は^(一)大院君の造營された宮殿で、幾多の宮殿樓閣が相連なつて、廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧ず、人頭税までも課して造り上げたといふ。所謂民の膏



景福宮

^(一)朝鮮李太王生父李昪の尊稱。

人頭税

膏血を絞る

血を絞つて築いたので、この宮殿が即ち李朝にたゞつたの

だといはれてゐる。

この宮の正門光化門前の通りなどは、幅六十間、東京にも全くない。現王宮昌徳宮も拜觀したが、これは近世の洋風に塗替へ、西洋の椅子、ソ^(一)ーファなどがあつて、面目が改つてゐる。しかし、總じて建築には丹碧を塗附けてあるばかりで、材木の削り方、仕上方は、日本のやうに立派でない。一體樹木の少い京城に、昌徳宮の裏の祕苑だけは、さすがに老樹が生茂つてゐる。しかし、なん等林泉の美とてはない。小さい溪流の石に題した句に、「飛流三百尺、遙落九天來。」とあるのには驚いた。

朝鮮人は怠惰で労働を嫌ふといふが、農業に精を出して

丹碧を塗る

^(一)sofa

林泉の美

苛政

德澤

働いてゐるのを見て、決してなまけるばかりの人間ではない。朝鮮の山を禿山にしたのも、長煙管をくはへて悠然として南山を見てゐる白衣の民を作つたのも、皆古來の悪政の罪である。苛政は眞に虎よりも猛である。我が一千万の新同胞は、今や仙人の生活を次第にはなれて、嬉々として我が聖天子の德澤にうるほひつゝあるのである。

明治天皇御製

をさめしる國のはてまでしらせはや

民やすかれとおもふこころを

紀元以前
神武天皇の御
即位以前

植林
樹を植ゑて林
をつくること

歸化
日本の國の臣
民となること
蕃殖
ふえること
豪族
勢力の強い家
から

自修文

古代に於ける日鮮の關係

日本と朝鮮とは大昔から深い關係をもつてゐて、古く紀元以前に日本から渡海した人もあれば、朝鮮から日本へ渡つた人も少くない。天照大神の御弟の素戔鳴尊は、その御子五十猛神を連れて新羅へ渡り、木の苗を持歸つて、紀伊國やその外の内地に植林した。中にも熊野附近が最も樹木に適したので、木の國といふ名もついたといふ。

次に向うから日本へ來たものでは、新羅の王子と稱する天日槍といふのが一番古いと傳へられてゐる。これは素戔鳴尊の御子の大國主神が、出雲地方を治めて居られた時に渡海して來て、その勢力に屈服し、遂に歸化して但馬に住居し、子孫蕃殖して、その地の豪族となつた。神功皇后の御母方は天日槍の子孫である。故に神功皇后は征韓の上に御便宜を得られたことと見える。ま

(一)朝鮮人。

(二)朝鮮半島の、

保護國
護つてやつて
ぬる國

た大國主神が出雲地方を治めて居られた時に、朝鮮の南端を日本に引寄せたといふ傳説がある。即ち「國來い」といつて引寄せて、それを出雲に縫附けたといつてゐるが、實際は韓人^(一)を多



(神功皇后中山中神風筆)

く日本へ移させて、植民した事實と見るのが至當であらう。

神功皇后の征服以後約四百五十年にわたつて半島を保護國として^(二)ゐた間、雙方の往來交通は頻繁で、戦争もたびたびあり、平和な貿易も盛んにあつたから、この四百五十年間が、古代に於ける日本と朝鮮との密接關係のあつた時期で、當時日本では、土地の割合に人口が少かつたから、移民を歓迎したので、盛んに朝鮮から移民を引寄せた。これ等の

轉住
更に他へ移住
すること
純朝鮮人
全くの朝鮮
人。ほんたう
な朝鮮人。

(一)第五十代。

(二)第二十九代。

(三)敵に捕へられ
た時、敵將を
しりぞく、
へりと呼びし
めようとす
む、
羅王に對し、
呼んで、
殺されて、
遂に

人の中には、農民も職工もあつたらうが、機織^{はたおり}を業としてゐたのが一番多かつた。絹織物がこの後日本に發達したのは、この移住民の力である。この人々は、もと支那人で朝鮮に移住し、それからまた日本へ轉住したものであるが、純朝鮮人の移住したのも少くはない。前後の移住民の統計がないからわからないが、ざつと四分の一はこれ等の移住民である。そしてこの人々は男女で移住したから、韓の婦人も當時澤山に來たであらう。また日本人で朝鮮に移住したのも少くないから、自然内地にも、朝鮮にも、雜種の子が殖えたことはいふまでもない。今でも日本人中に朝鮮式の顔が多少あるのは、この系統を引いてゐるのであらう。

蝦夷征伐で有名な坂上^{さかのの}田麿^のや、その子の坂上田村麿なども歸化人で、しかも桓武天皇の大功臣となつたのである。それより古く、欽明天皇の時に、新羅征伐に出て敗軍し、新羅に捕へられた時、敵の大將を罵つて殺されたといふ豪氣な調伊企^{しらひ}儼^{げん}といふ武

(一)第十五代。支那の黄河流域に發達して來た人種。

(三)大葉子は朝鮮の城邊に立つて、向郷の日に、木向の旗を振つて、頸巾を振つて、意領を振つて、昔婦人領巾と正装の時飾とに正装した布。

遙拜はるかにかむこと。最期の終。死。

人なども、先祖は應神天皇の時朝鮮から來た漢人種である。この時、伊企儼の妻の大葉子も捕虜となつたが、この大葉子を詠んだ歌に、

(三) 韓國の城の邊に立ちて大葉子は
領巾振らすもやまとへ向きて

といふ有名な歌がある。この歌は、大葉子が夫と同じく敵の前でわるびれもせず、城の上から日本の方を向いて領巾を振つて、最後の遙拜をした後、勇烈な最期を遂げたのを見て、日本人の感じて詠んだのである。この時伊企儼の子も父と共に戦死をした。夫婦親



(筆嶠香口谷)磨村田上坂

義烈 義心のすぐれたる事。遠征 遠國を征伐すること。希有 希う珍らしいこと。

(一)第三十四代舒明天皇の時、人天の皇の討つて逃れられたるに、遂に勵まして、遂に蝦夷を平らげられたる事を得た。僧聖武の皇の時、建つて道を開き、橋を架け、などあつた。續日本紀に、二、光仁天皇の御代、嵯峨天皇の御代、十年中、四、

子うちそろうての義烈は、目覺しいことであるが、やはりこれも韓國人の血統である。

また當時は婦人も勇悍で、夫と共に従軍するものもあつたことに注意せねばならぬ。ひとり大葉子のみでなく、夫と共に遠征に従軍したのは希有なことではない。當時はこの外にも澤山例があつた。上毛野形名の妻などもその一人である。



大葉子 (作雲朝山)

るし、建武中興の忠臣兒島高德も、本を尋ねればまた同様である。學者では菅野眞道も百濟人の血を分けたもの、周防の大名の大内氏なども、任那人の子孫であるから、朝鮮人でも長く日本の感化に浴すれば、立派な臣民となることは明らかかな證據のあることである。

萩野由之の文による

一二 漸進主義

八波則吉

(一)國文學者、第五高等學校教授。福岡縣の加人。詩趣を著味して等加味ある。
(二)支那晋代の博學者で、繪が非常に上手であつた。
(三)支那唐の太宗の臣房玄齡等が勅命によつて作つた晋の歴史。

佳境

訓す

昔顧愷之といふ人は、甘蔗を食ふ毎に、常に尾から本に至るのでした。或人がその理由を問ふと、愷之は「漸く佳境に入る。」と答へたと、晋書といふ書に見えてゐます。私のここにいふ漸進主義とは、即ちこの漸入佳境主義のことです。
「漸」の一字、これ私が平素最も愛する文字です。「や」と「や」や「やうやう」、「やうやく」などと訓じまして、次第次第の義です。急の反對です。一步一步の意味です。一足飛ではなくて、一足づつの意味です。漸進、漸進。これ私が平素最も愛する主義です。

(一)明治四十一年(戊申)十月十三日發布。
(二)今から四千餘年前、支那の周といふ時代の初頃にできたうらなひの書。

軌道

千古不易

(一)戊申詔書の中に、「自彊息マサルヘシ。」とあります。それは周易の「天行は健、君子は以て自ら彊めて息まず。」と同義だと承つてゐます。即ち日月星辰の運行は、幾萬年の往古から幾億歳の未來まで、自彊不息です。しかも一定の速度を以て、一定の軌道を漸進してゐるのです。御覽なさい、太陽は旦に出て夕べに没すること、きのふもけふも同様です。千古不易です。試に日向に棒を立てて日影の推移を熟視すると、少しも動いてゐるやうには見えませんが、暫時油断してゐる間に、驚くばかり移つてゐます。東北地方で、農夫が夏時田の畔や草原に寝てゐるが、竿に蓑笠を吊して枕元に立てながら、身はその蔭を離れる尺餘の炎天下に熟睡してゐるのを往々見

受けると、或旅行記に記してありましたが、よく天行の健を示すと同時に、君子ではないものの自彊不息實行難を物語

つてゐるではありませんか。

南洋にある珊瑚礁は、珊瑚蟲

と稱する微細な蟲の分泌する

石灰質の堆積ださうです。蟻の

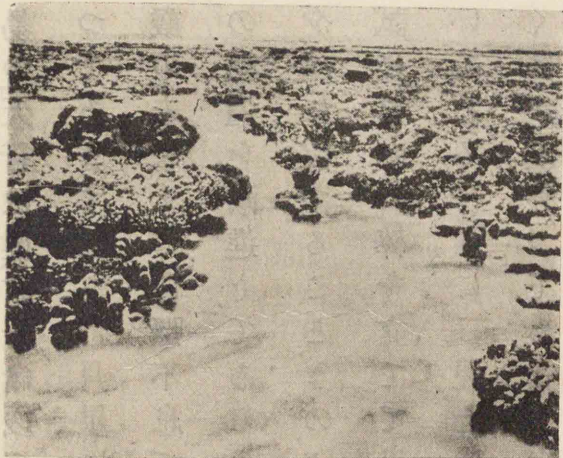
塔や蜜蜂の蜜などを見る毎に、

私は自彊息まない漸進主義の

効果の大きいのに驚かないで

はゐられません。

昔愚公が山を移したといふ話が、^(一)列子といふ書に出てゐる



珊瑚礁

分泌

^(一)二千三百年ほど前に支那の列禦寇といふ人の著した書。

^(一)徳川時代の儒者室鳩巢(享年三十九年)と三浦年(享年七十七)の著書。人口に膾炙す

て、^(一)駿臺雜話にも引いてあります。また鐵の杵を磨いて針を造るものを見て學に志した人の話は、よく人口に膾炙してゐます。いづれも根氣よく辛抱すべきことを諭した自彊不息の實例で、取りも直さず漸進主義の効果を語つてゐるのであります。

明治天皇の御製の中の、

いちはやく進まんよりも怠るな

まなひの道にたてるわらはへ

とる棹の心長くも漕きよせん

蘆間の小舟さはりありとも

大空にそひえて見ゆる高嶺にも

(一)古今和歌集
普通略して古
今集といつて
年四月十八日
紀凡河内八喜
恒之友生内紀
恒四人凡河内
天皇勅撰醜奉
歌集撰しを奉
塵ひぢ

鼓吹

のほれはのほる道はありけり
など、いづれも漸進主義、即ち息まない自彊の偉績を教へ給
うたものかと拜察します。古今集の序に
「遠きところも出立つ足もとより始りて、年月をわたり、高
き山も麓の塵ひぢより成りて、天雲たなびくまでおひの
ぼれる如くに……」
とあるのも、古歌に、
怠らず行かば千里のはても見ん
うしの歩みのよしおそくとも
とあるのも、また我が漸進主義を説明し鼓吹したものと見
れば見られます。

(一)小説家、文學
博士。名は成
行。慶應三年
東京に生まれ
た。五重塔洗
天打つ浪塔れ
門廣録の著者
る。等廣の著者
心廣の著者

一舉手一投足の勞

一三 伊能忠敬の晩學

(一)幸田露伴

忠敬年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして
家をその子景敬に譲るまで、みづから抑へて平々凡々の人
となり、一意専心たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を
最も圓滿に最も美しく果さんことを期しむたりき。
およそ才氣あるものの常として、己が欲せざることには
一舉手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲することには、み
身を委ねんとするは免れ難き習なり。たとひ己が欲せざる
ことなりとも、そのなさざるべからざることなる以上は、甘
んじて我が情を屈し、我が氣を抑へて、我がなすべきことを

なすは、その人管に才氣あるのみならず、また實に徳量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し、才氣ありて徳量ある人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃



伊能忠敬

の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば、世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途にことを

廢する例は數へて盡くし難し。忠敬が算數曆術の學を嗜み、且つこれをよくすべき資を抱きながら、みづから甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の希望とし三十餘年ひたすらその家

市井

丹精す

閑散

花月の遊

業に丹精したるは、實にその徳量の大きなるを見るべきなり。かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家のことまた憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、ここに於て圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は初めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時、忠敬年すでに五十歳、常人にありては最早老境に入るべき時なり。されど、心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり。なすある人には、如何なる場合も我が力を試るべきところなり。忠敬は、常人が世の務を辭し、花月の遊をこととすべき時に當りて、始めて學につき、後漸く世に出てんとせり。後のなす

笑柄

たる忠敬の老いたるをば屢、笑柄となしたりといふ。

墓穴に入る

晩學の難きは、實にいづれの世に在りても、かかる事實の存するが爲なり。これを以て、非凡の士にあらざれば、大抵みづから恥ぢて、師につき學を修むる勇氣を失ひ、空しく志を抱いて墓穴に入るに至る。本來より言へば、老いて學ぶは偶その志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可あらん、況や何の恥づべきところかあらん。思ふに、區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於てはたゞ蛙鳴、蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみか、かゝれば、忠敬と同門生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明らかなることなり。忠敬の學術は、宛ら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て、歩を進め、遂にそ

蛙鳴蟬噪

決潰

蘊奥を極む

の學の蘊奥を極め、東岡門下に比肩すべき者なきに至れり。かくて忠敬が初めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその齡五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は頽齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど、忠敬は氣力旺盛、宛ら壯年の人の如く、測量の命下るに會へば、喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬がことに當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃勃として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老なりといふ。これ豈我に忠敬あるを知らざる者にあらずや。

辟易

(一)中央大學教授
蕉翁の一人。芭蕉の著句集評釋
等の著がある。

一四 親の愛の歌

(一) 小林 一郎

一 大空の日の光、
光の中に物皆榮ゆ。
あゝ、貴しや我が父。
父の力を日と仰がん。

二 果もなき地の恵、
恵によりて物皆育す。
あゝ、貴しや我が母。
母の情を地と頼まん。

三

鬼神

父の愛厚ければ
鬼神も共にこの身を護る。
あゝ、頼みある人の世、
希望に克てる我が行末。

四

母の愛深ければ
世の波風も身を損はず。
あゝ、頼みある我が家、
永く榮えん國と共に。

五

國のため世のために
力つくせと教へ給ひし
我が父母の御ところ。

あゝ、これぞ我が家の寶。

六

父のため母のため

心つくせと教へ給ひし

我が大君の御ことば。

あゝ、これぞ我が國の寶。

一五 汝の母より

姉崎正治^(一)

世界大戰に於て、イギリスの一飛行士官が、敵たるドイツの飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地に落ちるのを見ると共に、それに乗組んでゐる敵兵のことを思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の跡を追うて着陸した。敵機は翼を

^(一)文學博士。東京帝國大學教授。潮風。明治六年。年。た。都。に。復。活。の。ま。曙。光。切。支。丹。宗。門。の。追。害。と。あ。る。等。の。著。が。

塹壕

^(二)Deutschland.

飛翔

もののははれ

^(一)Pocket.

一葉

折つて破れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸はすでに絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔してゐた人のことを思ひ、もののははれを覺えて、その死體を片附けてやらうと、胸のポケット^(一)のあたりにさはると、そこに一つ堅いものがあつた。これを搜り出して見ると、一葉の寫眞で、それには女の手で「汝の母」と書いてある。即ち今戰死した士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏してゐたのを見て、その士官は一層のあはれに堪へず、まづ敵の死體を身方の塹壕にもたらし、然る後再び自分の機に乗じて、なほ一戰した。その日の戦にも、イギリス士官は武運強く、安全に身方の戦線の後に歸つた。

感慨

その後イギリス士官は、この射殺した敵とその老母とのことを思ひ、それにつけても自分の身の上、且つは早くに亡くなつた自分の母のことを考へ、感慨に堪へず、敵士官の姓名をたどつて、彼が母へ一書を送つた。その書面は次の通りである。

「自分はイギリスの飛行士官です。何月何日、私は敵たるドイツの一飛行機を射落しましたがその敵兵は死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏してゐたのを發見し、その母御たるあなたにこの手紙を差出します。

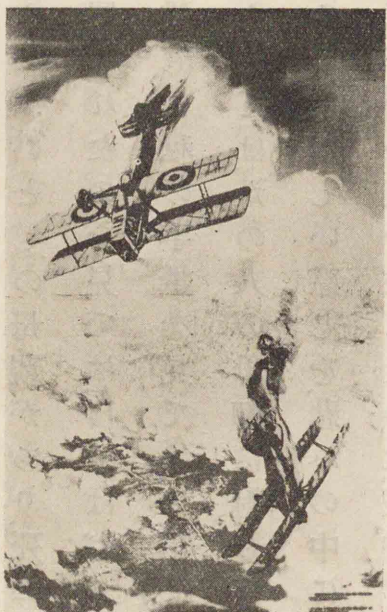
私はあなたの御子息を殺しました。しかし、その人を憎んだのでもなければ、その人の母御たるあなたのお悲みを

残忍

知らないはずもないのです。たゞ戦争といふ残忍な仕事に於て、これは私の義務でした。敵士官即ちあなたの御子

偵察

息が、身方の陣地を空



空中偵察の光景

中から偵察して無事に歸られたなら、その結果、身方は反對に攻撃を受けて、幾人かの兵は、その爲に命を失

敬意を表す

つたでせう。この不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、その乗組士官の身體に敬意を表し、それを片附けようとする時に、その人の母御たるあなたの寫眞を發見し

無量の感に打たれる

いとし

で、無量の感に打たれたのです。私には子供に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て、羨ましく思ふのですが、私の殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親があり、死ぬまでその寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分はじつとしては居られません。殺した私の手紙を見ては、口惜しくも思はれませうが、私としては、かの人の母御に對して、恰も自分の母に對するやうな親しい感じを、悲みの中にも禁じ得ません。私がかの人を殺したのは、戦争といふ残忍な悪魔のしたことです。あなたも、また亡くなつたあなたの御子息も、このことを思うて、私の殺人を赦して下さるでせう。さうし

中立國

てまた、かの人の亡くなつた代りに、私に一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書くこの手紙は、かの人と私と二人の魂が、一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上には書けません。涙で眼は曇り、筆を執る手も震へて書けません。この手紙はイギリス軍の本營から、中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の兒を喪つた母がこれを讀んだ時の感は、思ふも涙の種である。さうしてこの婦人は、數日の後長い手紙を書いて、かのイギリス士官へ送つた。その大意は下の通りである。

「御手紙の着く前に、子供の戦死は知つて居りましたが、そ

述懐

蘇生

の戦死の相手たるあなたの情深い御手紙を見た時の私の思は御察し下さい。通常ならあなたを子供の仇といふところですが、御述懐に接しては、その仇が反つて子供の蘇生となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが子供の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたの御手紙は、私にとつては、戦死した子供の手紙としか思はれません。あなたは子供を殺したといはれ、また事實その通りに違ひないことは知つてゐますが、殺すも殺されるも、共に各の國の爲で、人としてなん等怨のあるわけでないのは、お互に明白なこととせう。その怨もないものが互

に殺さうとするのは、畢竟は戦争の爲ですが、これについては、私は何も申しません。たゞ仇といふべきあなたが私を母のやうに思ひ、私もまたあなたが死んだ子供の身代りのやうに思はれるのは、なんたる不思議なこととせう。私には三人の男の子があり、戦死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戦線に出てゐて、いつ弟と同じ運命になるとも計られません。しかし、私は末子の戦死した爲に、あなたといふ新たな子を得ました。戦争が濟み平和の時が來、さうして、兄二人も無事に歸ることがあれば、私はあなたにもこの家へ一度來て頂きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あな

ぬめ 生糸を用ひて
織つた一種の
絹布

低徊
あちこちさま
よふこと

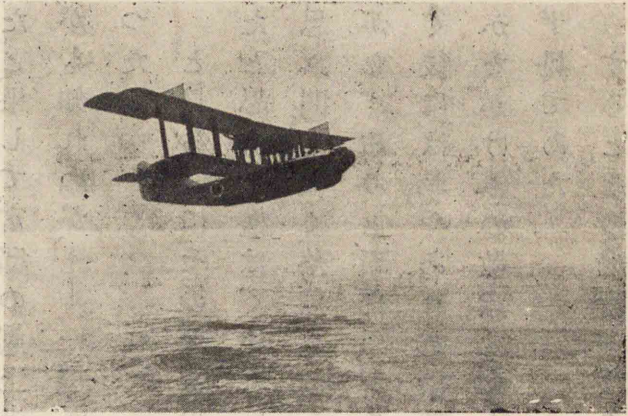
聯想
一つのこと
からこれに關係
ある他の事柄
を思ひ出すこ
と
film
大儀
つかれること

だつた。雲は高く、薄くぬめのやうに、ところどころ梳きぎれがし
たまゝ空を包んで、太陽が形を見せないで、在所^{ありか}だけを明るく見
せてゐた。
午前十時頃だつた。私はつい四五日前移つて来たばかりの避
暑宿の落着かない氣分で、ぼんやり柱に背をよせたまゝ坐つて
ゐると、遠くから近づいてくる震へがちな飛行機の爆音を聞い
た。それは益々近くなつて、どうやら頭上を低徊してゐるらしい。
「ははあ、飛行機の奴、また宮様に敬意を表し始めたな。」
すぐ私はさう思つた。そしてその瞬間、白い海軍服を着た宮様
が、何故か白い服が聯想せられた。御別邸の露臺で、望遠
鏡を中空に向けながら、近侍の人々に何か説明してゐられる光
景が、フィルムとなつて心に映つた。が、なんとなく大儀なので、そ
んな想像でたゞ心の中に飛行機の旋回をゑがきながら、出ても
見ないでゐると、爆音はなかなか遠ざからないうで、しかも時々風

横轉
飛行機の胴を
軸として横に
迴轉すること
逆轉
前方に迴轉す
るのと後方に
迴轉するのと
の二種あること

の加減か、激しくなつたり、突然なくなつたりする。
「變だな。」と思つて、私は縁側へ出て、宮邸の上空あたりを仰ぎ見
た。と、果して、宮邸の眞上あたりに、——事實はさうではなかつた
かも知れぬが、——一機が鉛色の翼を擴げて、方向を變へつゝあ
つた。
と見る間に、その薄雲の高い空の中で、爆音を一際高く響かせ
たと思ふと、機はぐいといふやうに横になつて、おや、落ちたなと
思ふ間もなく、落着きはらつた態度でだんだん逆さまになりな
がら、ぐるりと環をゑがき始めた。落ちたんでないなと思つたす
ぐ後には、おや、あれが横轉といふのだな。これはおもしろいぞ。な
かなかけふの敬意は念入りで、味をやるなと思つたので、瞬^{またま}もせ
ず見てゐた。
するとその飛行機はつづけざまに、ぐるり、ぐるりと三四回見
事に横倒しになると、逆轉してはまた元へ戻り、またぐるり、ぐる

りと、機翼を薄光りさせながら、宙返をつづける。そして少し高度が低くなると、當りまへの姿勢に歸つて、暫く上昇する間は休んでゐるが、見てゐる間に、すぐまた爆音を妙に響かせて、ぐるりぐるりを始める。初はまたするぜ、ぐるり、……おやもう一度か、ぐるり、……といったやうにおもしろがつて見てゐたが、それを何回となく、……無慮十二三回はつづけたらう。——つづけてゐる中に、なんだか妙に胸騒がして、危険なやうな感じがして、こちらが苦しくなつて來た、もうよしてくれ。そして落ちない中に歸つてくれ。さう願はずにはゐられないやうな氣持になつて來た。それだのに



水上飛行機の翔

性懲りなく、心のそこからこりること。

環旋くわんぜん、空中に回をふわいて飛行すること。

まだ性懲りなく、その飛行機は薄曇のした、そして薄光の漲つてゐる空で、ぐるり、ぐるりをつづけてゐる。

が、しかし、その飛行術の鮮かさは、我々が素人目には、全く驚歎に値してゐた。さても自信のあるものか、命知らずだ。ひよつとすると、餘り技術がうま過ぎるから、外國の教師か何か知らんなどと思つて、文字通り手に汗して見ずにはゐられなかつた。

と、やがて、やうやうその機は横轉を止めた。そして私たちのほつとした氣分の中に、すぐ歸るのかと思つてゐると、今度はまた環旋くわんぜんをふがいて、高く高く上昇し始めた。ははあ、今度こそもう止めて、高く飛んで歸つて行くつもりだな。さう思つて、なほもその行方を見てゐると、彼は突然はたと爆音を止めた。そして、おやと思ふ間もなく、機はゆらりと一搖揺れて、機尾を上垂れ下つたと見る間に、薄光を翼に二三度射させながら、ふらり、ふらり、ふらり、ふらりと落葉のやうに、中空へと錐揉きりみをしておりて來た。そし

危惧
びくびくする
こと。

(一) 神奈川縣三浦郡逗子町鎌倉の東南約一里。

執拗
しつこいこと
をいふ。

(二) 新潮社の感想
小品叢書第三
編。

(三) 小説家。早稲
田大學教授。佐
賀縣に生まれ
た。無類の人
問答。著光る。
運命の秋等の
著ある。
(四) 長野縣北佐久
郡。

てそのまゝで、まつすぐに下まで落ちやすまいかといふ危惧の中
に、またすうつと今度は横に流れると、そのまゝ忽ち機の陣を
當りまへに立て直して、今度は追濱の方面へ、脇目もふらずま
しぐらに一直線を急がいて、見る見る小さくなつてしまつた。
私はその機が向うの逗子寄りの丘の彼方へ黒點となつて没
するまで、縁側に伸上り伸上り見送つた。横轉をつづけてゐる間
は、随分執拗な飛行家だと思つてゐたが、その飛去りぶりのすう
つとしてゐるのが、非常に引立つて、なんとなく愉快だつた。

——微苦笑藝術——

一六 上高地遊記

吉田絃二郎

午前四時、水鶏のたゞく音に旅の夢を破られた。霧が重く
落葉松の小徑をこめてゐる。杜鵑の啼く山道を下りて沓掛

(一) 長野縣南佐久
郡の溪谷から
發し、後坪川
に合し、信濃川
となる。
(二) 長野縣更級
郡。
(三) 長野縣北部の
盆地で、千曲
川と犀川の會
合する一帯の
平坦地をいふ。

に出る。夜が明けたばかりの千曲川原を埋めて月見草が咲
いてゐる。篠の井から姥捨にかゝる頃には、雲も晴れ、善光寺
平に入る千曲川が霧の
下に見える。四つ五つば
かりの村童が赤く熟れ
た杏子をかゝへたまゝ、
畑の隅に立つて、汽車を
眺めてゐる。姥捨は田を
植ゑて幾日もない眺て
ある。



千曲川と犀川との合する所

孤鳥の霧を掠めて川を渡るのを見る。

(一) 木曾山脈に發する奈良井川と相會する松川
 (二) 本平に於ける川
 (三) 長野縣東筑摩郡の中心とす
 (四) 市郡の中心とす

(三) 松本市の西方
 (四) 松本市の西方
 (一) 大盆地に於ける
 (二) 三河の中心とす
 (三) 三河の中心とす
 (四) 三河の中心とす

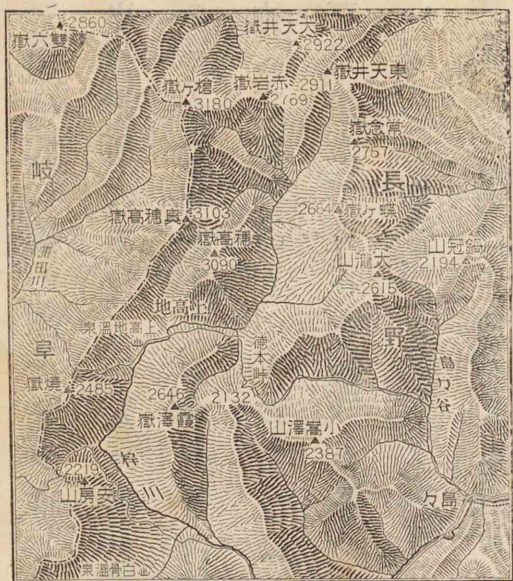
○
 幾つかのトンネルをくゞつて明科に出れば、視野は一轉して、^(一)犀川を隔てて松本平に移る。山にはまだ刈残された麥がある。草芙蓉が紅く夜明の山際に咲いてゐる。犀川の白い河原を隔てて、雨に濡れた連山が黒く巨岩のやうにそゞり立つてゐる。山のひだひだに雪溪の輝くのを見て、山をこふる旅人の心はをどる。雲が山腰を掠めては散る。

松本に著いたのは午前十一時半。島々^(二)までは電車があるが、^(三)上高地に登るには出発の時間が遅過ぎるので、同勢四人で島々まで自動車を走らせる。^(四)日本アルプス上高地は久しい間の私のあこがれの地で



朝の霧の地高上

(一)常念嶽と檜ヶ
 嶽に源を發し
 嶽に高地を
 上流地を松
 平を流れて島
 なる。厚川と
 本



ある町を出て間もなく松並木に沿ひ、梓川^(一)を右に見、飛驒高
 山への街道の古驛舊宿を過ぎれば、山はいよいよ迫り、川は

いよいよ白い瀨をなして
 流れる。

梓川の長い橋を渡り、水
 柳の軟かな影を眺めなが
 ら島々に著く。午後二時、道
 は島々南澤の流により、と
 ころどころ霧のやうな飛
 沫を浴びて、歩一歩溪に入る。上高地まで山徑六里もあるの
 で、前程を思つて先づ靴の紐を結ぶ。

行人の足をとどめる

(一)島々の溪谷に沿つた地點。島々から三里風情

山は迫つて溪は深く、岩を切り崖を削つてわづかに一筋の小徑を通ずるのみである。山は雲に接し、溪は蔭が暗くて、奔流は雪のやうである。斷崖が諸所にあつて行人の足をとどめる。桂とちさはくぬぎ、みやまなゝかまど、しなのき、白樺などが殊に多く、桂には二抱へ三抱へのものも珍しくはない。岩魚留(一)の桂は周圍二丈三尺、柔かた丸みを帯びたその葉の雨に濡れた風情は、捨難いものである。

(1)Rucksack (2)Pleker

或時は道に岩魚釣る男の下りてくるのに逢ひ、或時はまたリユックサックを背負ひ、天幕をかつぎ、ピツケル(2)を攜み、岩のやうな靴をはき、日焦けした顔の頼もしい青年たちの

(一)島々から上高地に出る間の

黙々として山を下りてくるのに逢ふ。行交ふ人は黙禮したり、短い挨拶を交はしたりして通り過ぎる。山を歩む人々の懐かしい美しい習慣である。交は善く小憩し、山を歩む人々の柚人たちの小屋を通り過ぎて岩魚留の茶屋に憩ふ頃になると、ふたたび雨は激しく降つて来て、日は暮れかゝつてくる。茶屋の口を掛つて中へ入ると、お茶を飲ませる。木つたうるしの花の雪の如く、またゝびの葉のやゝ紅らんだのが、美しく山を飾つてゐる。薄暮の山徑はしばしば雨に跡絶えてしまふ。徳本峠(一)まではなほ一里。風はますます荒れる。

(一)長野縣安曇郡にある日本アルプスの一展望

徳本峠は海拔七千百尺、上高地よりする登山者に取つて日本アルプス第一の關門である。日があり、天氣さへよかつたなら、上高地の溪谷を隔てて直ちに穂高の靈峰と面接するだらうし、恐らく穂高展望の隨一だらうが、日は暮れ、嵐は木を搏つ。峠の茶屋の戸を排して中に入れば、既に五六人の學生たちは、毛布をかむつて寢につかうとしてゐる。雨を防ぐ爲にかむつて來た油紙は破れ、肌は雨に打たれて、寒さにわななく。シャツを取りかへ、冬の外套を著て、少憩した後に山を下る。日は暮れたが、まだ道はほの白く見える。雪溪は遙かに道

わななく

辨じ難い

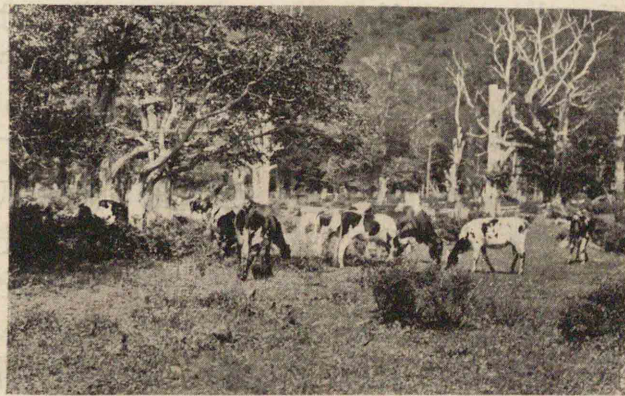
に沿つて、夕闇のなかに流れてゐる。山を下るにつれて木立が深く、道はやがて爪先をも辨じ難くなる。雨のなかに提灯を點して道を拾ふ。雨具の下に燭をいたはりながら守つたが、幾度か消しては、嵐のなかに立迷ふ。道に沿うた雪溪だけが、闇のなかにたどたどしく浮かぶ。

(一)上高地の登山旅館

下つて行く溪の方の霧の中から、俄に二三点の燭が見出された。旅館五千尺からの迎の火ではないかなどと語りながら、火を目あてに下つて行く。五六人の若い人たちが立ちどまつてゐて、大きな牛が數頭この下の道の真中に寝てゐて、とても下りて行けぬから、峠まで引返さうと思つてゐる。

ぬかるみ

といふ。私たちは山を下つて行つた。いかにも立派な乳牛が一頭の子牛を連れて、嵐のなかに悠々と道の真中に寝そべつてゐる。子牛の頭を撫でてやれば、雨に打たれた眼をしばたきながら旅人を仰ぎ見る。間もなく道は平坦になつた。廣い露の葉と隈笹とに包まれたぬかるみの道を急ぐほどに、道は沼と化して、しばしば脛を没する。野兎が道を横切つて、提灯の燭を掠



上高地の牧場

(一) 乗鞍嶽。島々
の西方。長野
と岐阜縣と
の境をなし
てゐる。

める。天も地もたゞ晦冥。山も見えなければ、空も見えない。恐らく私たちは、五六千尺の深い霧の海の底を歩いてゐるのであらう。振返れば、後からついて來てゐたかの五六人の登山者たちは、いつの間にか遠ざかつてしまつて、遙かの霧のなかにたゞ一度夢のやうに描き出された火影を見出しただけで、終に火影を失ひ、聲をも失つてしまつた。私たちは急ぎに急いだ。幾度か燭をかざしては丸木橋を渡つた。濁流は丸木橋を沈めてゐた。その間にも山の男たちは、山案内の喜作爺がその子とともに雪崩に打たれて死んだこと、乗鞍の牧場に熊が出て番人を食殺したことなど、いかに山物語らしい話をつづける。

燭が消える。嵐は溪に狂ふ。たゞ嵐の聲のみである。靴には水が溢れ、背には冷たい雨が流れこむ。著替へたばかりのシヤツもぐつしよりになる。まゝよ。とばかり、快く雨に打たれながら、草を分け、木の下をくぐる。

(1) Camp.
(2) 徳本峠と上高地との中間、キャンプ地として知られてゐる。
(3) Tent.

霧のなかに二つ三つ四つと幻のやうな燭がまたゞき初める。若い人たちのキャンプである。小梨平の柔かな草の上には、若い人たちの美しい夢を守る幾十のテントが、寂然として嵐のなかに横たはつてゐる。
夜十時、上高地の旅宿「五千尺」に著く。雨の爲にテントを逃げて来た人たちが集つて来たので、宿は俄の混雑である。
旅館「五千尺」は六百山の懸崖を背にし、梓川を隔てて直ち

に穂高に對してゐる。裏の小暗い湯槽に浸りながら、靜かに恐しい嵐を聴く。燭は暗く、笕の水は氷のやうに冷たい。いかにも山寺のやうな建物の感じである。部屋部屋のランプの燭の薄暗いのも、山の宿らしい懐かしい感じをわかさせる。二階の西南端の一室に、先づ疲れた軀を横たへる。
窓の下はすぐ梓川の激流になつてゐて、渚の水柳が夜の影をこめて、窓を打たんばかりに茂つてゐる。
隣室には七八人の若い人たちが、雨の晴れるのを待つて眠つてゐる。ひどく疲れてゐるらしくをりをり、部屋の境の板戸を蹴つて夢を破る。

幾度か眼を覺しては、頭をもたげてガラス窓越しに空を

見る。星一つない。たゞ凄じい嵐の聲と瀬の音とのみが夜通し狂ひに狂ふ。

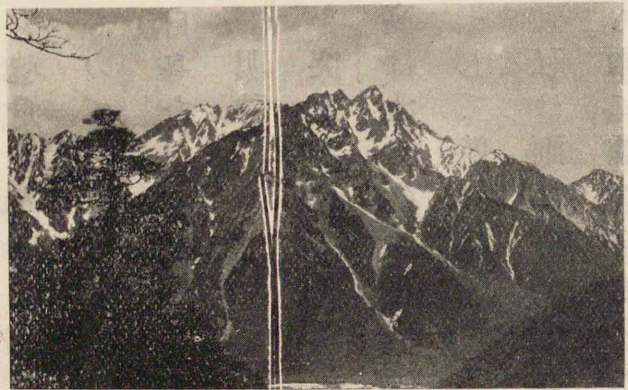
まだ夜が明けきらぬうちに、隣室の若い人たちは雨を衝いて宿を出て行つた。

夜明方になつて雨は小降りになつたが、梓川の流はひたすらに水聲を増しに増した。

私は起きて窓を排して直下の流を眺めた。梓川はやゝ濁つて、渦をなして流れてゐた。

水柳の下葉は重く水に垂れてゐた。小雨が横なぐりに降つてゐた。橋の上には二三の若い人たちが、空模様を案じて

は、たゞずんでゐた。



めてゐた。

私はふとその刹那に窓と直面し

高てそゞり立つてゐる黒い岩山の一

穂角を見出した。雲は低く垂れて、僅か

高に梓川の水柳と、白樺の森林地帯だ

のけ残してゐた。

連十分、二十分、私は暗い心を抱いて、

峰密雲の奥に隠された穂高の雄姿を

大想像しつゝ、低く垂れた水柳の枝の

下をくゞつて行く梓川の流を見つ

直面する

(一)上高地と前穂高との中間にある。

岩燕が半天を掠めて、南から北へ矢の如く飛んだ。魂飛ぶといふのは、恐らくその刹那の私の心の説明したものであらう。私は偉大な穂高の靈峰に直面してゐる自分自身を見出した。

(一)明神嶽から前穂高の正面が、その鐵のやうな千仞の懸崖を、突兀として天に接してゐるのであつた。一萬幾百尺の穂高は、北の半天を劃つて、直ちに天に觸れてゐるのであつた。そして僅かに梓川の流を隔てて、窓に迫つて來た。

私は雨に濡れた穂高を見たことを心から喜んだ。嶺も岩も雨に濡れて、鐵のやうに黒い。そこに雲のなかにほりつけられた幾百條の飛瀑が、その黒い岸壁を縫うて、天空から飛

散るのであつた。

雲が晴れ雨が止むにつれて、穂高の大雪溪は黒い岩山と岩山との間に、大傾斜をなして天界から悠然として流れて來た。最初は瀧のやうに見えた。雲が黒い溪を静かにはひながら尾根の方へ上るにつれて、雪溪は横にも縦にもひろげられて行つた。

雪溪を取巻く幾つもの岩山と岩山との間には、はひ松の森林地帯が例へば青い島々のやう



(左) 嶽高穂と(右) 嶽神明

聯想する

に取残されてゐて、それらの島と島との間には、柔かな、しかも雪溪に劣らぬほどな廣い草原が輝いてゐる。白い雪に對してその草の青さは、恰も貴い瓊玉を聯想させる。半日その草の上に仰臥して白日夢を貪ることを得たら、如何に楽しいことであらう。雲は靜かに草原を掠め、雪溪に消え、やがて絶壁に湧いて天に攀ぢる。

「空が晴れた。」と若い人々が狂喜して叫んだ。雲のすきまから日の光が、⁽¹⁾ミルクのやうな白樺の幹を照らしてゐた。河原のほとりにはまだ小雨がさまよつてゐる。

その刹那であつた、私は曾て見たことのない美しい自然を見た。

(Milk)

雨に濡れた穂高、明神の全幅を通して、七月の太陽は一草一石一木の上にも白銀をちりばめてしまつた。岩は白銀に輝き、瀧も、雲も、斷崖も悉く光つた。岩を落ちるしづくが悉く光りに光つた。

忽ちにして雲は山を包んだ。たゞ幾百條の銀龍のみが日の光を浴びて、黒い岩に縁り雲の間を縫つて、私たちの頭上一萬尺の高さを翔るのであつた。

私は雨の上高地を訪れたことをありがたく思つた。

——白日の窓——

(一) 詩人 明治二十五年東京市に生まれた。著層空と樹木の下の高がある。著層空と樹木の下の高がある。

一七 私の村

(一) 尾崎喜八

停車場を出て買物の包を小脇に、
無愛想無趣味な白茶けた道を
汗になつて足速に
たうとう向うの丘を上りきると、
あゝ
ゆるやかにうねる並木路のはづれに、
高くさんさんと金緑の
海角によせて碎ける海の浪のやうな
ひとかたまりの森のあたまで、
あれが私の住む村だ。
なんといふ美しい村だらう、

印璽

なんといふ木立に恵まれた村だらう。
七月の夕暮の空は
薄紫の晶玉の清らかさをして、
朱鷺の抜毛のやうに細い雲が
すらすらと
軽い模様を描いてゐる。
私がどこの我が家へ着く頃には、
水の垂れさうなあの天へ、
宵の明星が
たつた一つびかりと
金の印璽を捺すのだ。
さうすると村中が
やはらかい深々とした蔭に満たされ

月見草と小川とだけが闇に浮き、
 私の家や庭などは咲亂れた星の花の下で
 たゞ地上の小さな燈ともしびの光ばかりになつて
 しまふだらう。

そこへ歸つて水を汲上げ
 汗をばさばさ拭きとつてから、

この包をひろげる樂しき、

あゝ、その我が村我が家が向うに見える。

— 日本詩集 —

(一)小説家。號は
 蘆花。熊本縣
 年昭和十二
 年。昭和人六
 自然出の生。
 思ひ歸の寄。
 不如歸の著。
 木等の著あ

一八 夕立

德富健次郎

けふ早めに夕飯を食べて庭に出てゐると、北からひいや

天穹
 天心

りと風が來た。眼を上げると、果して果して、北に一團紺青色
 の雲が立つてゐる。その紺青の雲を背にして、こんもりとし
 た隣家の杉や、檜ひのきの木立、孟宗竹の藪などが、いづれも生々なまし
 い緑を浮かしてゐる。
 「夕立がくるぞ。」
 主人は大聲に呼んで、手早く庭の干物、履物などを片づけ
 る。裏庭では、婢をんなが驅けて來て、洗濯物を取入れた。
 やがて食卓から立つて妻子がおりて來た頃には、北天の
 一隅に埋伏してゐた、かの濃い紺青色の雲が、忽ちにむらむ
 らと湧起つて、何の艶もない濁つた煙色になり、見る見る天
 穹を這上り、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心に、ずんず

(一)ヨハネ黙示録
キリスト教經
典の新約聖書
中の一節

んと擴がつて來た。三人は芝生に立つて、驚歎の眼を見はつて、この夥しい雨雲の活動を見た。

「あな夥しの雲の勢や、黙示録に、天は卷物を捲くが如く去行く。」と歌つたも無理はない。青空は今南の一軸に捲きちぢめられ、煤煙の色をした雲の大軍は、その青空をすら餘さじものをと、南をさしてひた押しに押寄せてゐる。つい今しがたまで雨をこひしがつてゐた乾ききつた眞夏の喘は、どこへ行つたか、たゞ十分か十五分の中に、大地は恐しい雨雲の下に閉ぢこめられて、冷たい暗い冥府になつた。

雲の運動は秒一秒激しくなつた。南を指して流れる雲、渦卷く雲、眞黒に屯つて動かぬ雲、雲の中から生まれる雲、雲を

冥府

眞夏の喘

ひた押し

摩つて移りゆく雲、濃くなり淡くなり、淡くなり濃くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙をここに集めて、煤煙の限りなく湧くやうに、眼を驚かす雲の大行軍の音響を聞かぬが不思議である。

冷たい風がすうすうつと顔に當る。後れ馳に雷がそろそろ鳴りだした。北の方で、條をなさぬ紅や紫の電光が、時しばつぱつと天の半壁を照らして閃く。近づく雷雨を感じつつ、我等はなほ頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした満天の雲は、益々南へ流れた、水のやうに、霧のやうに、煙のやうに、空は皆動いてゐる。潤い空はどの一寸四方と

天の半壁を照らす

息をひそめる

して、動いてゐないのはない。草木も人も息をひそめたかのやうに、一切の物音ははたと絶えた。



雷 雨 (大智勝観筆)

空はたうとう雲をかぶつてし
雨まつた。著しく水
氣を含んだ北風
が、ぱつぱつと顔
をうつて来た。や

母屋
Lamp

がて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。母屋の南面の雨戸だけ残して、悉く戸を締めた。暗いのでランプ(一)をつけた。ざあつと降りだした。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄じく見せ

颯々

て、ぴかりと電が光る。颯々と激しく降りだした。見る見る庭は川になる。雨が飛石をうつて跳反る。目に入る限りの青葉が、一葉、一葉に雨を浴びて、嬉しさうにぞくぞく身を震はしてゐる。

「あゝ、いいおしめりだ。」

と誰かがいふ。

「まだ七時だよ、まあ。」

妻と婢との驚いた聲がする。

夕立から本降りになつて、雨は夜すがら降つた。

—み、ずのはこと—

(一)俳人。鳥取縣の年。大正六年。著玉集等の編集。

適宜の所
ほどよい場所。

蟻塚
蟻の泥土を積んで造つた塚。

ぬき足さし足
音をたててぬき足に歩くこと。

自修文

蟻

(一) 坂本四方太

夕立は今しがた霽れて、所々に綿のやうなちぎれ雲が浮いてゐる。庭におりて見るともなしに立つてゐる中、ふと蟻の穴に目がついた。

暫くしやがんで見てゐると、今は雨後の修繕と見えて、どの穴でも工夫が頻りに土くれを外に運び出してゐる。工夫は身長五分ばかりの大蟻で、土くれをくはへて出ては適宜の所に投げて歸る。ひとつの穴に十匹ぐらゐ働いてゐるので、この時はや幾らかの蟻塚の形ができた。蟻塚といふのは彼等の頭より遙かに大きくさうして重い土くれの集りて、取りも直さず工夫の油汗を流して持出したものである。

何かくれてやるものはないかと思つて、そこらを見廻すと、しろの菊の葉に大きな蠅が止つてゐる。ぬき足さし足近寄つて手をさし伸べて捕らうとすると、蠅はふういと飛去つた。しくじつたと思ひながら息を凝らして窺ふと、今度は前よりも一層要害な葉の上に止つて、ここまでお出で」といつたやうに、尻を天にむけて身構へた。さうして両手を揉んで頻りに頭を撫でて見せる。「己れ憎い奴め」と思つたが、前の失敗に懲りて今度は警戒に警戒を加へて、じりじりとつめ寄つた。こちらの武器はたゞ爪一つなので、満身の力を爪先にこめてびちんと弾くと、手答があつて確かに命中した。

蠅は三尺先の大地にのけぞり返つてもがいてゐる。早速蠅に投げてやると、さあ大騒だ。蟻が出て来て引張り込まうとする。蠅は片足踏張つて引かれまいとする。いよいよ蠅と蟻との相撲が始つた。したたか争つてゐる中、蠅は痛手に疲れ、たうとう穴に引張り込まれた。まづ、安心と思つてゐると、蠅の頭がにゆうつと出て来たのには驚いた。その中力もつきたと見えて、再び引張り込

のけぞり返る
うしろへそりかへること。

最期
死にぎは。

まれた。今度は幾ら待つてゐても出て来ない。蠅は實に死力を出して争つたのである。蠅とはいへあつばれな最期であつた。自分は餘りのおもしろさにもつと蠅はゐないかとあちらこちら探した。菊畑には人殺し、否蠅殺しがあつた。といふ噂でも立つたのか、今度は蠅の影さへも見えない。しかたなく臺所に行つて飯粒と麩の切れとを取出してその蟻の穴の口においた。すると一時は蟻も驚いたやうに二三匹宛寄つて来て、上つたり下つたりしてゐたが、しまひには鼻突合はせて、精進はいやだね。今少し暇な時ならまだしもだが、人間の氣が利かないのにも困つてしまふ。といふやうな風で、もう見向きもしない。例の開鑿に熱すると、天から降つたか地から涌いたか、數千の蟻が知らぬ間に庭の彼方に眞黒に集つた。その擴りはおよそ直徑二尺ばかりの圓形をなしてゐる。やがてこの群が運動を始めて自分が先程まで見てゐた蟻埜に近づいたと思ふと、數十の蟻がやにはに蟻埜に

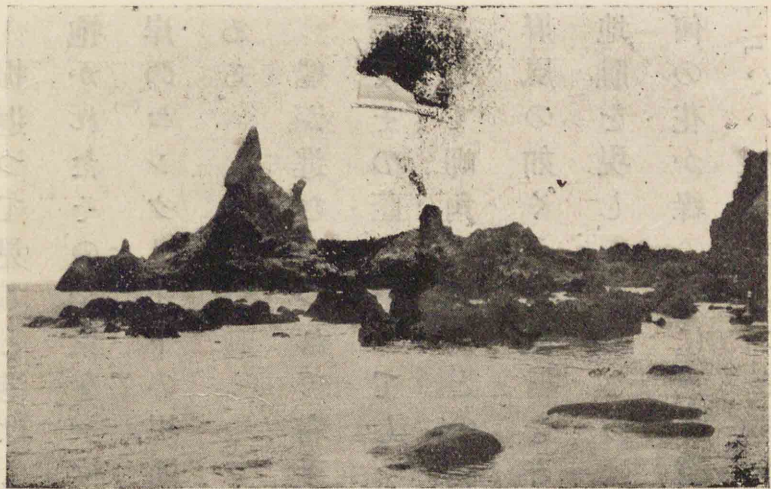
精進
魚鳥肉を禁じて野菜類ばかりを用ふるこ

突入した。他の蟻も我も我もとそこに向かつて走つた。まるで軍隊の突貫と同じだ。殆どみんなはいつてしまつて、残りが僅かに十四五匹となつた頃に、先登の蟻が白い繭のやうな形をした卵をくはへて驅出して來た。つづいて二匹、三匹と驅出して、それから後は出るとも出るとも潮の寄せるが如くに出て來た。てんでに白い卵を持つてゐるからをかしい。運動會の提燈競走はこんなに人數が多くない。祝賀會の提燈行列はこんなに活潑でない。實に庭内の一大奇觀である。

先登ははや庭を横ぎつて、隣の庭の草叢を踏越え、ぐり抜けに行く。皆々つづいて行く。どこまで行くかと首を伸ばして見てみると、隣の庭を横ぎつて、遙か彼方の胡瓜畑の方に行つた。をりから座敷の時計が四時を打つた。この掠奪は僅か四五分間に終つたのである。蟻埜はひどく荒されて、工夫等はどこに行つたか遂に一匹も見えなくなつてしまつた。

掠奪
うばひとるこ

甲高な調子



男鹿半島(その一)

一つを指していふと、舳の方に
 坐つてゐた控への船頭が、
 「なあんのいいことが——」と、
 力強く否定して、今はともかく、
 冬になると、北からの吹雪が直
 接に吹きつけて、それはそれは
 大變だといふ意味のことを、食
 肉鳥の鳴く聲を思はせるやう
 な甲高な調子で早口にいふ。
 その船頭はなかなかおしや
 べりて、あれこれと、指しながら、

錯雑

いろいろ話してくれるのだが、どうも言葉がわからない。そ
 れに波が高いので、やゝもすれば言葉が波の音にとられて
 しまふ。錯雑した岬角は、益々頻繁に現れては隠れ、隠れては現
 れる。もう漁村などはない。もう一つ廻ればいよいよ島が見
 えるといふあたりの岬の鼻に船をとめて、岩の蔭に日を除
 けながら、船頭たちと一緒に用意の辨當をたべる。午後二時
 頃である。港からここまで凡そ二時間かゝつたわけだ。
 やがて陸に引き沿うやうに船を進めて、その岬角をぐる
 りと一廻り廻ると、前面に一つの平つたい島が現れた。
 あれはおぼけ島といふのだと、代り合つて休んでゐる無
 口の船頭が教へる。遠くから見ると大きく、近づくに随つて

小さくなるからさういふのだといふなるほど、近づくにつれて小さくなる。小さくなるのではない。幾つもの小さい島、いや島といふよりも岩礁に分裂するのである。

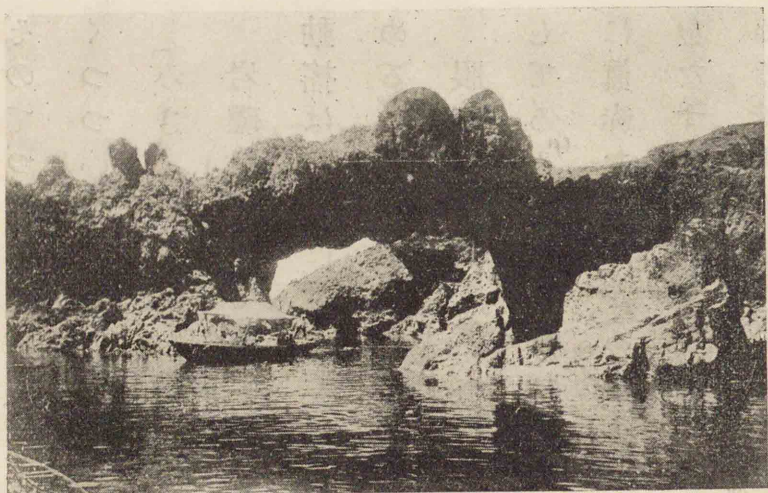
このあたりから島といつても皆岩礁なのだが、それがちらほら見えだし、断崖の姿も次第におもしろくなる。

断崖の裾から走りだした岩礁が、やがてとぎれとぎれに尖端だけを水上に浮かべて、蒼い波の上に真直な黒い点線を引いてゐるのがある。船はその点線を横ぎつて進む。

船が進むにつれて、景色は益、おもしろくなる。牛の横たはるが如く、狗の走るが如く、といふやうな漢文句調でもなければとても形容しきれない、所謂奇巖怪石のさまざま

崔嵬

Pyramid.



男鹿半島(その二)

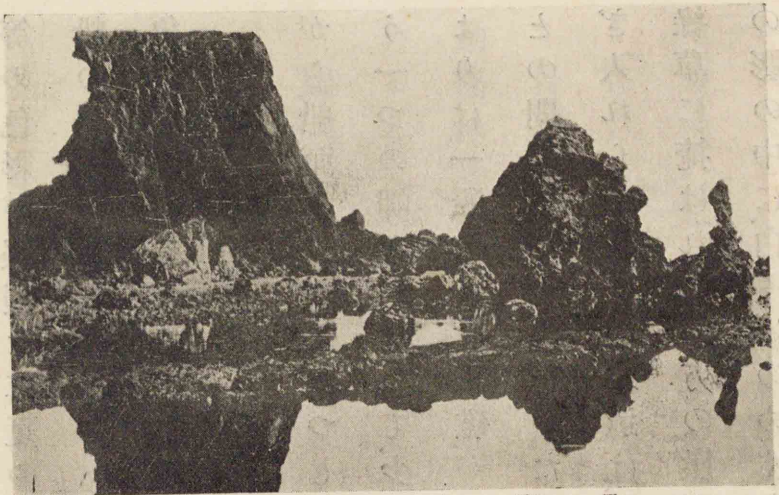
やつが崔嵬として、また突兀として、絶壁の裾に群がり立つてゐる。その中に龍ヶ岩といふのがあつた。ピラミッド型の大きなもので、鑛滓色の肌には、小さな松などがところどころに生え、裾の方には貝殻がいつぱいくつついてゐる。頂上には鳥の糞が積つてゐる。高さは五六丈ばかりもあらうか。龍が頭を振りあげたやうな形をしてゐる。

そのてつぺんの所に、枯草見たやうなものが一とかたまりくつついてゐるのを見つけて、何かと聞くと、
「みさごの巣だ」と船頭が答へた。
岩礁を噛んで波は躍りあがる。そのあたりへくると、船の動搖は非常に激しくなる。船にしがみついて貪るやうに眺める。ここへ來て、始めて眼が覺めたやうな氣がする。

眼が覺めるといへばその海の色だ。海の色は濃い紫色をしてゐる。岩礁は概ね鑛滓色をしてゐるが、中には炎のやうに眞赤な色がある。そして、それ等林立した岩礁には背景をなす斷崖のある部分は、燃えたつばかりの緑に掩はれてゐる。紫、赤、緑そして岩裾を噛む波頭の雪のやうな白さ。それ

等の色彩が強烈な眞夏の日に輝いて、しかも激しく搖れる船の中からは、上に下にいり亂れながら不安な錯雜した印象となる。宛として未來派の畫面であつた。

さあ、これからがおもしろい、といふ意味のことをいひながら、船頭はえつし、えつしと一際聲を張りあげる。そしてもう一つの岬角を廻つて、少し進むと斷崖に沿うて、今までのよりは、一際大きな岩礁が三つ四つ立つてゐて、岩礁と斷崖との間は、狭い水道をかたちづくつてゐた。船はその間に漕ぎ入れられた。その水道は、瀨のやうに靜かで深藍の水には、綠草に掩はれた兩方の崖が深く倒影を沈めてゐる。その緑の影の中に、白くほのめくものがある。眼をあげて見ると、崖



男鹿半島(三のそ)

の上の草むらの中に、白い花が
二三輪咲いてゐた。多分百合の
花だつたらう。
二三町ほどの水道を渡つて
ゆくと、今度は岩礁の中間が、辛
うじて船を容るゝに足るだけ
の洞門にくりぬかれてゐるの
にぶつつかつた。大棧橋といふ
のである。
その次が蒿雀かうせうの窟である。岸
の斷崖に深くゑぐれ込んだ洞

窟、疊なら十疊も敷けようといふ大きな洞窟である。船頭た
ちは、そこでちよつと躊躇してゐたやうだが、やがて思ひ切
つたやうに、舳をその窟に向けた。船は激しく揺れる。半分ほ
ど入れかけると、また一つ大きく揺上げて、その拍子に舳を
強く岩壁に打ちつけてしまつた。

「今日はいけねい」と船頭は残念さうにいつた。私は眞暗な
洞窟の中をそつとのぞき込みながら、その奥の方にびたび
たと鳴つてゐる波の音に耳を澄ました。

大棧橋、蒿雀の窟、男鹿半島の勝はまづこれまでである。そ
こから少し行くと、もう岩礁の奇はつきる。しかし私はそこ
の絶壁がやがて緑の草に掩はれながら、見上げる眼もかす

むばかりの高みまで、大佛の背のやうな圓みを以てつづいてゐた、そのなだらかな感じを忘れることができない。そして、一體どこをどうして來たものであらうか。その中腹のあたりには白い手拭を冠つた女が二三人しきりに草を刈つてゐた。その豆人形のやうな姿と、その女たちの歌ふらしい幽かな唄の聲とを忘れることができない。

そこから船を返した。歸りは追風に帆を孕ませて、船は滑るやうに走つた。船川の港について船からあがると、もう黄昏はあたりに迫つてゐた。

—わが小書板—

二〇 七月の日記

夏目漱石

(一)小説家。名は金之助。東京の年五十五。ある草枕。評論集の著者。ある。東京市牛込區。

七月九日。晴天。暑さ甚し。晚方水道町から神樂坂を散歩。天斗を散らして、真中を藍に塗つて、そこへ銀で棒を引いてゐた。天井には岐阜提燈が澤山ぶら下がつてゐた。

神樂坂に蟲屋が荷を出してゐた。長さ一間ぐらゐの荷の上を屋根のやうにして前に暖簾をかけてゐる。黒い中に白い字が染出してある。真中に山の下へ越の字、その左右に蟲の名が竝べてある。松蟲、鈴蟲、轡蟲、……中には籠がいつぱいある。扇の形、舟の形、鳥籠の形、紫の紐でくくつたものや、緋

の紐でむすんだもの、それから家の形にできたもの、蟲屋はその下に腰をかけてゐる。殆ど足を動かすことさへできない。

七月十一日。かんかん照りつける。殆ど堪へ難い。籐椅子の上で

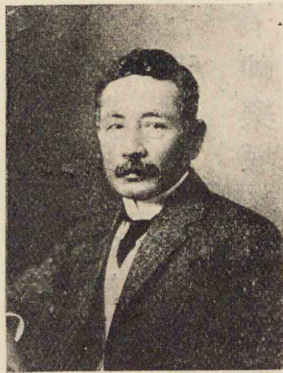
昏々

上で昏々としてゐる。晩方えい子と、

あい子純一を連れて神樂坂へ散歩

に出る。氷屋でアイスクリームを飲

む。純一は氷あづきを食ふといふ。お



漱石 肖像

もちや屋でえい子は金製のベ^(二)ッド、あい子は西洋人形、純一は飛行機を買ふ。この飛行機は、飛ぶこと受合のところ、ちつとも飛ばず、翌日すぐ破れてしまつた。

(Ice-cream.)

(Hat.)

七月十四日。六時頃散歩に出ようかと思つてゐると、空が急に暗くなつて、雨が木の葉をうつ音がした。それがまたたたく間に轟然として地上のあらゆるものを鳴らして、すさまじく降出した。すると雷が鳴つた。雷より稲妻の方が激しかった。光りがだんだんになつて、最高度は白晝と異なるところなく光つた。さうしてそのだんだんが一瞬の間にすべてを經過してしまふ。あとは暗くなつてもものすごい。芭蕉がさまざま動く。光りに恐れて、縁側の戸を立ててゐた下女が突然玄關へ來てつつ伏した。この時電燈が全く消えた。巨人が帛を裂くやうな音がしてそれがすぐ割れた。

七月十七日。曇。十時頃から降出す。

(一) 東京市の小石川と牛込との区界を流れてゐる。

(二) 東京市小石川区陸軍造兵廠内にある庭園。水戸公の舊庭園。

蒼茫

昨夕江戸川を散歩して澤山ある橋の中の最も小さい橋の欄干によつて東を眺めたら、水の左右から水の上へのしかゝるやうに柳が緑の枝をさし出してゐた。それが遠くに行つて櫻に變つて、兩岸が蒼く丸くこんもりと高く見える中に水が長く流れたその中を、橋がいくつも横切つてゐる。さうして、すべての末に後樂園の高い森の中から砲兵工廠の煙突が二本出てゐた。
こんどは電車終點の所へ来て、同じく橋の欄干に倚つて西の方を望んだ。その時は人の顔が漸く區別されるくらの薄暮であつた。その上空が曇つてゐた。けれども、その薄黒い空明りが水の上に落ちる爲か、流一面が蒼茫とした地面

の上よりも、岸よりも、明らかにきらきらしてゐた。その中に小船に人が二人乗つて棹さして上つて行く。船も人もたゞ眞黒に輪廓が眼に映ずるだけであつた。動く棹がやはり細く黒く見えた。この黒いものが光る水に包まれて、廻り燈籠の影法師の如く見えた。やがて豎にさす棹の色がぼんやりして判然しなくなつた。
——漱石全集——

二一 波の花

(一) 吉江喬松

日本を離れた船がヨーロッパへ向かつて行く途中では、さまざま美しい港や、珍しい國々へ寄つて行くのです。その中で、日本から第一に著く港は、支那の上海といふ所

(一) 佛文學者。早稲田大學教授。明治十三年長野縣に生れた。青年の空想の著者。海外に翻譯物が多い。Europe

です。これは揚子江といふ支那で一番大きな河の岸にあるのです。船はこの河の口から次第に上流へのぼつて、それから支流の吳淞江といふのへはいつて、暫くしてこの上海の港に著きます。

この揚子江は支那大陸の山の奥から流れてくるので、川上から大きな材木を筏いかだに組んで流して來ますが、その上には筏師の一家族が生活してゐます。そしてその出發點では、長い間の生活ができるやうに、いろいろなものを積みこむのです。鶏を籠ごと積みこんで、卵を牝鶏メトリに暖めさせます。すると、筏がそろそろ流を下つてくるうちに、いつか卵が雛鳥に孵化します。そしてだんだん大きくなつて、ときをつくる

やうになつて、立派な幾羽かの鶏ができる頃に、やうやくその筏は川下の港まで著くのですが、その港ではその筏を皆ときくづして、材木として賣拂ひます。筏の上で暮した人たちは、こんどは船に乗つて川上の故郷へ歸つて行くのです。そしてまた筏を組んでは流してくるのです。

こんな長い河ですから、山から流してくる土や砂がいつも水の色を黄色にしてゐます。そして海へはいつてからも凡そ六七十哩の間は、この揚子江の水で海水が黄色に濁つてゐます。

上海の市街は支那大陸の一部には建つてゐるのですが、この町は世界の殆どあらゆる國々の人々が集つてゐる町

碇泊

で支那の政治とは全く離れた獨立の小さな一つの國のやうになつてゐます。イギリス人、アメリカ人、フランス人、日本人などが集つて、役人を選んで、それで政治をやつてゐます。世界の各國の小さな縮圖のやうな都會です。支那の舊い城もあれば、ヨーロッパ人の立派な公園もあり、日本人の會社もあつて、船著場にはあらゆる國の國旗を掲げた船が碇泊してゐます。

外國人の生活を知らうと思ふならば、日本を出て第一に上海に來て見るのが一番の近道です。

(一)支那廣東灣上にある小島。

上海を出て、臺灣海峽を通つて三日間許り行くと、香港と

いふ英國領の島に著きます。ここは全くのヨーロッパ風で、市街が小さな、そして高い山を中央にして、島を取巻いて建つてゐます。美しい立派な廣い道が島の周圍を繞り、次第に山の中腹まで繞り繞つて登つて行きますが、山の頂までは、外國人は何人でも登ることは許されません。なぜならば、この島はイギリスの東洋での大切な商業の港であると同時に、大切な要塞砲臺のある所で、その要塞の設備を外國人が見てはならないからです。

この島には、日本人はなかなか澤山商業をやつてゐます。會社の代理店などはいくともあります。香港の市街の美しいのは夜です。そしてそれは港に碇泊してゐる船から眺め

やつた景色です。海岸より山の中腹までだんだん高くなつてゐる家屋のあらゆる窓から電燈が輝いて、ちやうど大きな蜂の巣の一つ一つの孔に燈火をつけたやうです。そして港の中を通ふ小蒸氣は、花電車のやうに美しく飾つて、あちこち走りまはつてゐます。上海を経て香港までくると、いよいよ洋行したやうな氣になります。

香港から先はシンガポールといふ港です。^(一) 棕櫚の花咲くシンガポールと皆さんが歌ふその港です。ここはもう熱帯で、地面から、空中から、暑さがどつと人の身體を包みます。船から下りて市街を通ると、強い花の香やら、水菓子屋の前で鼻ぐやうな果實の香氣やらが、鼻を打ちます。ここの公園へ

(Singapore) 馬來半島南端の島。東西貿易の中心地。
 (一) 棕櫚の花咲く椰子の實を共に賞讃する句。
 (二) 池邊の椰子の實を共に賞讃する句。

行くと、眞紅な幹をした檳榔樹が、眞青な葉をして立つてゐます。また六七寸もある金色や青色のとかげが、草の上に眠つてゐます。そして木の枝には栗鼠がかさかさ木葉を動かして飛んでゐます。水の面には紫色の睡蓮がぼつぼつ咲いて、夢でも見てゐるやうです。眞晝頃になると、しんとして物音一つ聞えませんが、咽せかへるやうな強い光の香が、空中に漂つてゐるばかりです。全く異なつた國へ來たといふ心持がします。

それから先の港は椰子の實みのるセーロン島^(一)です。皆さんは椰子の實といふものが樹になつてゐるのを見たことがおありですか。大きな猿の頭のやうな形をしたのが、幾つ

(Ceylon) 印度洋中の大島。

(Knife)

も幾つも高い樹の上になつて、いかにも重さうに見えます。その外皮をむいて、また真中から二つに割つて、中の眞白な實をナイフでそいで、生で食べたり、煮て食べたりします。生栗を食べるやうな味のするものです。

船の上から見ると、このあたりの海岸は、ちやうど日本の海岸が松の林で覆はれてゐるやうに、どこまでも椰子の木で覆はれてゐるのです。そして船が港に著くと、どこからともなく、眞黒な子供が小船に乗つたり泳いだりして、その船の周圍に集つて來ます。ちやうど眞黒な大きな魚の群のやうです。これが何かわいわいひながら、水を潜つたり、浮上つたりして、船のあたりを騒ぎまはります。これは乗客から

錢をもらひに來たのです。そして銀貨を投げてやると、すばやく小船の中から飛びこんで、銀貨の水中に沈んで行くよりも早くその下へ廻つて、巧に受止めるのです。その巧なこ



飛魚 (堀江春齋筆)

と、どんなに遠くへ投げても、また船の眞下へ投げても、一つとして受損ずるやうなことはありません。水中でも、水の表面でも、自由自在に飛びまはり泳ぎまはるには驚かされま

す。セーロン島を出た船は、普通ならば印度洋を横切つて、紅

(一) ヨーロッパと
アフリカとの
間にある海。

(二) Cape of Good
Hope.
アフリカの最
南端英領ケ
ープ植民地の
岬。

海を通つて地中海へ出るのですが、私の乗つた船は、戦争最
中で地中海が危険だといふので、印度洋を南へ南へと下つ
て、赤道を越えて、アフリカの南の端の喜望峰といふ所へ向
かつたのです。
地圖を披いて御覽なさい。セーロン島から喜望峰までは
随分長い間です。船はちやうど十七八晝夜、山も陸地も見え
ぬ水の上、いくら四方を眺めても何一つ見えぬ大洋の上を
走つて行つたのです。
ところが船が赤道を越える最後に、無風帯といつて、年中
風の少しもない所があるので、我々の地球の表面の真中
を帯のやうに取巻いてゐる一帯がそれです。そこは鏡の面

水平線

(一) Screw.

のやうに平かで、どつちを見ても小波一つ起りません。たゞ
船脚に碎ける波が、深い眠から覺めて驚くやうに、少しばかり
騒ぐだけです。眞青な水。目が眩むやうな日の出。一片の雲
もない大空。まんまるく四方を取圍んだ水平線。我々の船は
今やこれ等の真中にあるのです。そしてその船から立上る
煙は眞直に立つて、少しも亂れません。太陽は帆柱の眞上か
ら光を放ち、ちやうど鏡張の室の中へでも身を入れてゐる
やうに四方に照りわたつて、實に爽かな氣持です。
けれど、廣い廣い大洋の眞唯中に、生きて動いてゐるもの
とては何もありません。また何の音も聞えませんが、我々
の船ばかりです。我々の船のスクリーパーが立てる音ばかり

です。かやうに静かな眠の國を一日か二日か航行して御覽なさい。明るいけれど、何ともいられない寂しさのあるものです。そんな時に、波の土を不意に掠めて飛んで行くものがあるのを思つて御覽なさい。何でせう。銀色をした小さな魚が列を作つて縦に横に波の上を舞つて行くのです。小鳥ぐらゐの大きさに見えますが、實際はそれより大きいに違ひないのです。飛魚です。今まで油のやうに淀んでゐた眠の海、死の海の中へ、不意に大きな船がはいつて来て、不思議な姿をして波を切つて行くので、びつくりして俄に波の中から飛立つたのでせう。一列になつて十も二十も飛んで行くのがあ

るかと思ふと、横に並んで競争するかのやうに、後から後からと飛出すのもあります。その銀色にきらきらと光るさまは實に一大壯觀で、目もくるめかかばかりです。これが波に咲く花です。そして、これこそはこの無風帯に於けるたゞ一つの波の戯です。たゞ一つの生きたものの姿です。

船がこの無風帯を出抜けると、波がそろそろ高くなつて來ます。今まで滑るやうにしてゐた大きな船體が揺れ始めます。波の大きな頭が遠くから眞青になつて起つてくると、いつの間にかその波頭は船の底へ潛り入つて、船を持上げます。船は思はず前後によるめき、船底のスクリーンはさも苦しげに音を立てて、忙しく廻轉します。けれどこれぐらゐ

はまだ何でもないとす。船が次第次第に目を重ねてアフリカの岸近く寄つて行きますと、潮の流が急になり、船の動揺が一層激しくなつて來ます。さうすると、どこから出て來たのか知れないが、眞白な大きな信天翁あしたどりといふ海鳥が、船の上を、また船の周圍を包んで飛びまはります。

——角笛のひびき——

二二 膽力 嘉納治五郎(一)

大丈夫と生まれたからには、死生の境に出入して從容自若として事に當り、天下の大事をも談笑の間に決するだけの膽力を有したいものである。膽力のある者は、白刃が眼前

(一) 貴族院議員。東京高等師範學校名譽教授。萬延元年攝津國に生まれた。

死生の境

天稟

に閃き來り、危岩が頭上に崩れかゝつても、悠然として身を保持することができる。膽力のない者は、天井から鼠の糞が一つ落ちて來ても、膽を冷やし色を失ふやうなことになるものである。胆力は天稟にこれを有して居る者も少くはないのであるが、また決して修養し得られぬものでもない。主杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて、門番所の板敷の下に潜伏しながら安眠して居つたことや、徳川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に行つて死人の首を持歸つたことや、ネルソンが幼時から恐怖の何ものたるを知らなかつたことなどは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた

魁偉

例もまた決して稀ではない。昔武田信玄の部下に岩間大藏左衛門といふ武士があつた。容貌が魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、性質は至つて卑怯であつた。信玄がこれを實戦にためししてみたのに、七度進んで七度退いた。信玄は「これではとても普通の方法で教誨激勵することはできない」と思つて、或日また戦争の始つた時、大藏左衛門を掩護物のない所に縛りつけ、敵に向かつて坐らせて、一步も身動きのできないやうにした。矢丸は雨のやうに飛んでくる。銃聲は雷のやうに轟く。大藏左衛門は恐怖して、殆ど死人のやうになつてしまつた。しかし、その戦争のしまひまで、幸に矢丸は中らなかつた。

自械自縛

そこで大藏左衛門は翻然として悟り、壽命さへあれば、雨のやうに降る矢丸でも中らない、死は決して畏るべきものでないと知り、その後は戦争ごとに勇を奮つて前進し、遂に武名を揚げたといふことである。これで見ても、諦めるといふ心の持方の、膽力養成に必要であることがわかる。危険、災害等の場合に於て、成るべく安全にこれを避けようとするのは、自然の人情に相違ないが、しかし、さういふ心の爲に却つて怯懦に陥ることがある。その最も悪い結果を身に引受けても、是非に及ばぬといふ覺悟を極めれば、膽は自然にすわるのである。強ひて危害を避けようとする、煩悶し、疑惧し、狼狽して、自械自縛するので、

衝動的

十分の伎倆も六七分にしか働かず、却つて不結果に陥るのである。諦めるといふ心の持方の練習のあるものは、危害が身に迫つた時にも、この際に狼狽したところでし方がない、執るべき方法はたゞ一つのみ」と諦め、その方法に全力を盡くして、さて敗れたならばそれまでの事と覺悟を極めてかかるから、別に恐れるやうなことはない。

落膽喪神は、或場合にはその危険の結果を豫想した後ではなくして、衝動的に直接の瞬間に起つてくることがある。これは動物の本能の一つで、殆ど制止し難い勢を以て發動するものであるが、かゝる場合に何か良い工夫はないであらうか。

(一) 臨濟宗。宮城縣宮城郡。瑞巖寺の西南にある小島。

○ 雲居和尚といふのは、伊達政宗に招かれて松島の瑞巖寺(一)に住んで居つた名僧であるが、毎夜雄島の石窟(二)に行つて、坐禪して居つた。或時一少年がその悟道の程をためさうと思つて、路傍の松の上に隠れ、和尚が下に來たところを、手を伸ばして頭をぐつと攫んだ。和尚は立止つたまゝで動かなかつたので、少年は手を放した。數日の後、その少年は和尚に向かひ、近頃寂しい所で怪物に出會つたことはなかつたか」と問うたら、答へて、「いや別に會つたことはない。五六日前、闇の中で自分の頭を攫んだ者があつたが、その手に暖みがあつたから、子供らの悪戯だと思つた」といつたさうである。その雲居和尚の沈勇は如何にして養はれたものであるか、定

めて心膽を練つた結果であらう。しかし、かかる場合に處すべき簡単な一法として、ここに少年者に告ぐべきことがある。それは他でもない、下腹に力を入れることである。これは氣を落著ける一法として、古來經驗の上から有効と認められてゐるものである。世に、理窟の上からは妖怪のないことを信じてゐながら、暗夜墓地を通過して石塔の陰から突然犬の飛出すのに、思はず膽を冷やすやうな者がある。かういふ時に、下腹に力を入れると、今飛出したのは犬であるか、猫であるか、或は他の者であるか、判斷がつき易くなるのである。衝動的に起る恐怖心を去るのも、畢竟鍛鍊の功に待つ外はないのであるが、吾人は年少

の人に、まづその手始めの一法として、このことを勧めるのである。さうして終には種々の工夫を凝らして、天地の顛倒するやうな大變にも、泰然自若として我を失はないやうな剛膽な人とならんことを望むのである。

——青年修養集——

二三 座右の銘

中根 東里

- 一、父母をいとほしみ、兄弟に睦まじくするは、身を修むる本なり。本かたければ末しげし。
- 一、老を敬ひ、幼を愛しみ、有徳を貴び、無能をあはれむ。
- 一、忠臣は國あることを知りて、家あることを知らず。孝子

(一)江戸時代の儒者。伊豆の人。明和二年(一七六五)歿。年七十二。親五。東里文集の著者ある。いとほしむ有徳無能

- 一、は親あることを知りて、己あることを知らず。
- 一、祖先の祭を慎み、子孫の教を忽にせず。
- 一、辭はゆるくして誠ならんことを願ひ、行は敏くして厚からんことを欲す。
- 一、善を見ては法とし、不善を見ては誠とす。
- 一、怒に難を思へば悔に至らず、欲に義を思へば耻をとらず。
- 一、儉より奢に移ることは易く、奢より儉に入ることは難し。
- 一、樵夫は山に登り、漁夫は海に浮かぶ。人各、その業を樂しむべし。

他山の石

- 一、人の過をいはず。我が功に誇らず。
- 一、病は口より入るもの多し。禍は口より出づるもの少からず。
- 一、施して報を願はず。受けて恩を忘れず。
- 一、他山の石は玉を磨くべし。憂患のことは心を磨くべし。
- 一、水を飲んで樂しむものあり。錦を衣て憂ふるものあり。
- 一、出づる月を待つべし。散る花を追ふこと勿れ。
- 一、忠言は耳に逆ひ、良薬は口に苦し。

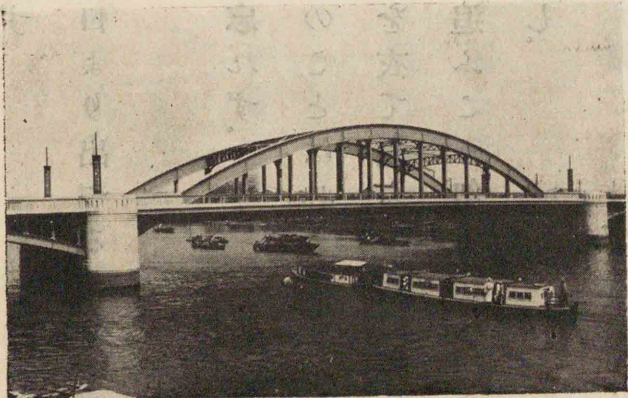
— 東里外集 —

自修文

文章雑話

一

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験のなかつた私も、漸く岸を離れることができて、みるやうになり、次第に中流までも進み得るやうになつて、一夏も水泳場に通ふ中には、向うの河岸まで泳ぎ越すことができた。更にまた一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃には、よくも分らなかつた瀬の早い遅いも分つて來たし、淡水と潮水の雜り合つたあの川の中の冷たい所と温か



隅田川

(一) 島崎藤村

(一) 詩人、小説家。名は春樹。明治五年長野縣に生れた。春風。新片町より。藤村詩集等の著がある。

(二) 荒川の下流。櫻樹と、端艇競争で名高い。妻橋は多く、吾妻橋は新大橋附近で行はれる。

河岸
舟から人や荷物などを揚げる場所。

境地位置

(一) 長野縣北佐久郡、淺間山の西麓

い所とも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の様子を泳ぎながらに見ることもできるやうになつた。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を横切つて往復することができた。私は、普通の泳ぎ手が行ける所までは、自分も到達し得たやうに感じたけれども、それ以上に進むことはなかなか容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身のできる人を見たり、拔手の上手な人を見ると、全く感歎した。

文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして根氣さへあれば、そこまでゆくことは決して困難でないに相違ない。

二
信州の小諸^(一)にゐた時分、私は弓の稽古をしたことがある。誰でも、最初の中は、的に向かつて矢を當てることばかりを心がける。

心に頼むところがないこと
自信のないこと
辨別
見わけ定めること

矢場
弓術のけいこをする所

一手揃ひ
同じやうに揃ふこと
焦心
思ひをこがしめて心を苦しめること



正しき弓の姿勢

「たゞ當りさへすればいい」かう思ふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んでゆく。射手の心に頼むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は、徒らに、煩い高慢な「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私たちの矢場に來た。その老人は、まづ「姿勢」を正すことを私たちに教へてくれた。それから私たちの矢は、たとひ的を貫くことができないうな場合でも、一手揃ひで同じ場所をゆくやうになつた。これは文章の道にも當嵌めて見ることができる。たゞ好文章ばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する

サクをかけること
肥料をやること
元土を高く盛りあげるこ
蔓などを絡ませる爲に立てた竹や木

道でない。眞に好い文章を作らうと思へば、どうしてもまづ「自己」から正してかからねばならない。三
同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書の傍、よく鋤を擔いで行つて、土を耕して見た。私はまづ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を砕いた。小石をえりわけた。地均しをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植易いものから作つて見た。その畠には、大根、白菜、茄子、豌豆、胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクをかけた行つた。馬鈴薯の花の盛の頃、試に土の中を探つて見ると、はや丸い薯が幾つも幾つもの根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の丈よりも高く手に絡みついた。畠の中には、嫩かい莢を摘む缺の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある

耕地を見て廻り、ほんたうの百姓の手でよく整理されてゐる畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私は或耕作を通じて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でもよく思ひ出すことができる。文章の手本とすべきものが、どれほど我々の周圍にあつても、それを悟らなければ仕方がない。それを悟らうとするのには、どうしてもまづ自分で試みなければならぬ。試みる」といふことは、「悟る」といふことの第一歩だ。

四

(一) 浅草の新片町に住んでゐた頃、家が浅草橋や兩國橋に近いので、私はあの隅田川の界限を漕廻つたことがある。最初の中は無暗と手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し、手もとへ引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつたが、次第次第に手足を動かすことが少くて、身體全體の力

(一) 東京市浅草區新片町
界限あたり

傳馬船傳馬船に添へた小舟

力の省略
力をいらぬところに置きな
ないこと
簡素の美
極めて平易で無駄のないこと
筆を弄する
むやみやたらに書きちらすこと
(一) 感想集 大正十一年東京市アルス發行

でゆつくりと櫓を押すことができやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あいつに一つ衝突しないやうに。かう思つて漕いで行く楽しみなども、それから起つて來た。その後、船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには「力の省略」があり「簡素の美」があつた。

文章の道に於ても、無暗と筆を弄することが決して自己の眞の「表白」とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶の力」がある。

(一) 飯倉だより

作文の趣味

大町桂月

雄大の文を好めど、みづからはこれをよくせず。また幽奇の文を好めど、これもみづからはよくせず。人を刺戟する文、人を動かす文、また人を笑はせる文、みな余の好むところなり。氣あり、才情あり、かねて識ある人にして、始て余の好む文章ができるべし。

(一) 詩人。名は操
明治二十二年
兵庫縣に生ま
れたる。園生
露風詩話等
著あり。

二四 秋を感ず

三 木露風

蟬の聲かなたに聞え、
日の光白うして、
この朝は、いづことなく、
秋を感ず。

緑なる高き草木に、
風吹きて、
その葉を戦がせたるに、
その戦ぎに秋を感ぜしむ。
あゝ日の光の白く弱くして、

時々雲間を洩れて照りくる、
その光に秋はあり、
静けき秋はあり。

白き蝶飛びて、
なほ秋のすがれを、
見ざれど、
庭の深みゆく緑に、秋はあり。

空を飛行く鳥、
その鳥の姿、
しばしして消えたるに、
秋を覚えしむ。

價がある。晝間はつくつくばふしが銀鈴を振るやうな聲を
 立てて鳴きしきつて、夜は少しづつ蟲の音が垣根のまはりに
 聞えてくる。さうなつてくると、だんだん夏の眞盛の時分
 の例へば、桶など日向に出して、はしやぎきつて緩んでゐた
 やうな心持が、新秋の涼味と共に緊つて來て、新たな希望を
 以て、新たな仕事に取りかゝらうといふ楽しい心持になつ
 てくる。

空の様子なども、眞夏の盛には光線が強過ぎて、よく晴れ
 てゐる時でも、水蒸氣が多く空が低く見える。それが初秋に
 近づくに随つて碧空が鮮かになり、白い雲は益々純白で、天地
 自然がどことなしにはつきりしてくる。さういふ白い雲際

時雨

から起つてくる白い風が、庭の芭蕉や、高い梧桐の枝葉に訪
 れて、その音がだんだん冴えてくるやうな氣がする。一體、夏
 は植物が成長する時であるが、水蒸氣が多いので、はつきり
 して見えない。それが初秋になると、あの五月頃の若葉の色
 に見る柔かたで、しかも爽かな明るさとはやゝ違ふけれども、
 その時分の若葉の隈に見るやうな鮮かさをもつて、木の葉
 や草の葉の先などが、鮮明になつてくる。

初秋の候には時雨が多くて、陰晴定まらない。さういふ時
 分に、洗濯物を物干に乾かしてゐるのに時雨がして、女が忙
 しげに取入れるところなどに、自ら秋のくるといふやうな、
 あわたゞしいやうな、また寂しい味はひがある。

更ける

(一)群馬縣群馬郡
榛名山の中腹
海拔八五〇メ
ートルの所に
ある温泉町

(二)神奈川縣箱
根山。山水の
美をかけた温
泉場。第一の
遊覽地

秋もやゝ更けてくると、いつしか芙蓉も凋み、萩も散つて、木犀もぎがそこはかたなく匂つてくる。この木犀の香りは、確かに秋を象徴したものである。木犀の匂ふ頃は、だんだん秋も酣はになつてゆかうといふ時であるが、わたしは前にもいつたやうに、新秋の雲の色は、實に綺麗だ。高山にゐれば殊によくそれが見られる。わたしは先年伊香保(一)に行つたをりに、殊にさういふ感じがした。九月の末頃のことであつたが、もう山をおりてくる時分に、高い山の一角から見ると、青い所は、手を觸れゝば殆ど手が染まるかと思ふばかりの紺碧の色をして、山の岫たけを出た白い雲が、その空に影をかざしてゐた。九月の頃箱根(二)にも行つてゐたことがあつたが、山路のと

ころどころに設けた口ハ臺の上に仰向に寝轉んで、一人て空を見てゐたことがある。高山で空を仰ぎ見るくらゐ、實に高く、遠い思のするものはない。

二六 松と大和心

池邊義象(一)

自然は人生の鑄型で、人間は常にその鑄型の中に泳いでゐる。随つてその影響感化の多大なことは、素よりいふまでもない。まして人間は種々に理窟をつけて、自然を味ははうとしてゐるではないか。(二)本居宣長が「たゞ敷島の大和心を櫻花に比して以來、また藤田東湖が萬朶(三)の櫻を神州正夫の氣の發して成つたものと唱へて以來、櫻は大和心の異名と

(一)國學者。熊本縣の人。大正六年三月三日歿。著「大和心」

(二)江戸時代の國學者。伊勢國松坂の人。享和元年(二二)年歿。七十二年

(三)水戸の儒者。名は彪。安政五年(二五)年歿。萬朶異名

媚ぶ
阿る

群小

風潮

大和心の雄々しさに比べて、決して不足はない。また大抵の草木は美花を着けて、世に媚び人に阿るおもね観があるのに、松だけは不動の姿勢をとつて、そんな人目を喜ばせるやうな群小のしわざを嘲笑して、いつも緑色に保持し、風潮に動かされない有様は、正に大丈夫の態度を備へてゐると見なければならぬ。殊に年を経るとともに、その幹が龍の如く、虎の如く、鳳凰の如く、麒麟の如く、世人に畏敬され、愛重されるさまは、元勳、偉人にも譬ふべきであらう。

松はかくの如く剛性のものであるが、たび吹く風を宿せば、彈琴の響を傳へ、或は長堤十里、霞を曳き、霧を吹いて、まるで繪のやうな光景を呈することがある。また波打際に枝

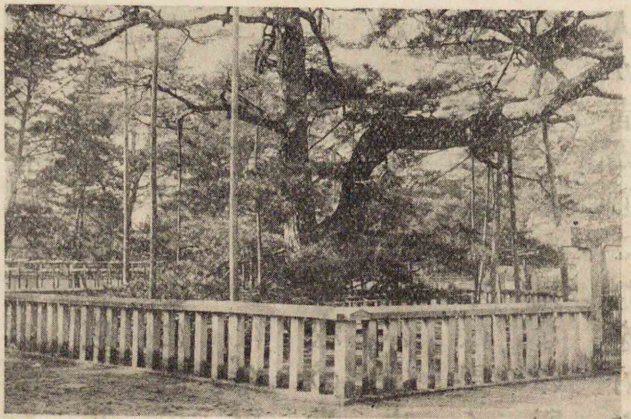
元勳

彈琴の響

堅忍不拔
泰然自若

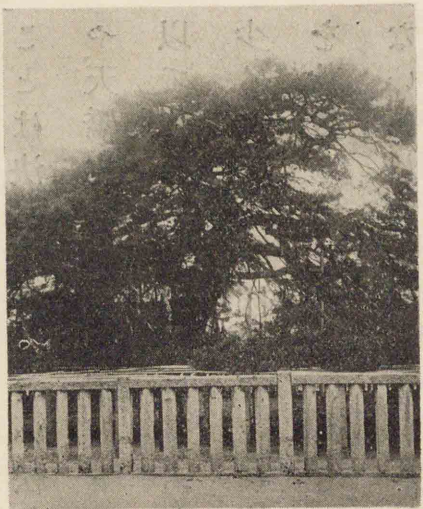
を垂れては水とその清さを争ひ、或は少年少女に引かれてその齡を延すなど、その優美柔和な點に於ても、また我が大和心に通ふことは決して少くない。松島や、三保や、天橋立の如き、所謂天下の奇勝を以て鳴る土地が、松に負ふところの少くないのも、國民がそれ等の勝地を歎賞して已まないのも、いはれがないわけではあるまい。

かやうにいひたてれば限りもないが、剛柔兩性を具備して、堅忍不拔、泰然自若として風潮に



松 上 尾

動搖しないのは、自覺ある日本人に比して、斷じて不足はない。一時に咲き、一時に散るその潔き有様や、花に一點の醜を



留めないその美は、櫻を以て花會の第一とし、我が大和心に似て根あるところを賞するのは、今更のいふまでもないが、この松の貴松ぶべきところも、また大いに味はふべきである。この木は畏く

も神前、宮庭をはじめ、津々浦々に至るまで、一木を見ない所はなく、風景に、盆栽に、繪畫に、我が國人が昔からこれを好むのも、その心が互に相通ずる爲であらう。

津々浦々

あゝ、この松、剛柔兩性を備へる松、全國全家悉く有する松が、どうして我が國民に感化を與へないで居らうか。私はここに櫻と相並べて松を以て日本の木とし、大和心の象徴として、更に大いに賞揚したいと思ふのである。

二七 月雪花

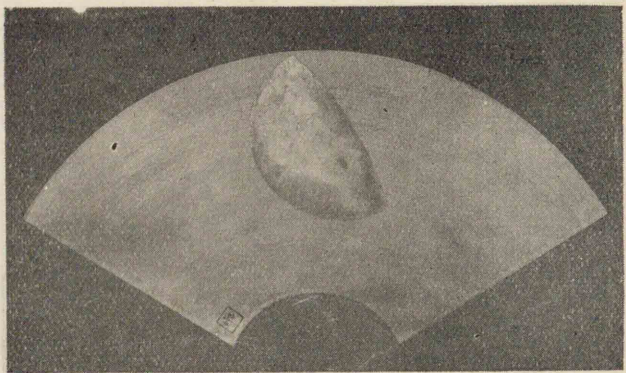
春はハナミ、夏はスミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のまだけが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼はまた格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。「御月様いくつ」の俚歌、雪

雅興
俚歌

徑庭
詩的教育
塵世
隱遁者

よふれふれ。の童謡、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんでゐるのである。月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐人も高麗人も美しいといふに違ひないが、彼等の感ずるところと、我が國民の感ずるところとは、大きな徑庭がある。西洋人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をもつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育された。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは、隱遁者の所行であるが、少くと

皎々
皎々たる明月
皎々たる白雪
利慾に營々たり



月雪花 (前田青郵筆) 一のそ

も皎々たる明月、皎々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めてゐる間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術と同じく、人を高尚にし、人を溫雅にするのである。我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。月に叢雲、花に風、月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さ

吟詠
譬喩

有情化
有徳化

光風霽月

君子人

邪佞の徒
なぞらふ

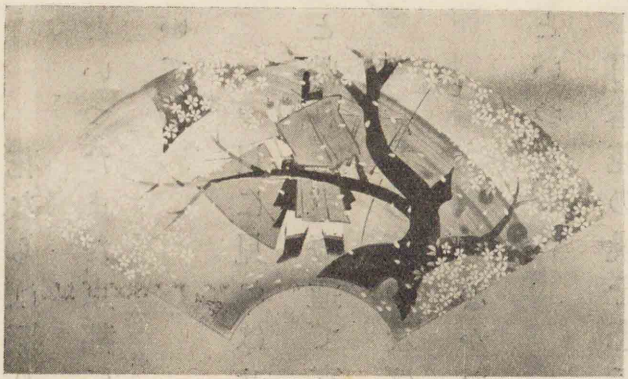
氷潔



二のそ (筆 郵青田前) 花 雪 月

うして繁榮隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひてゐる。我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々な美德を附加する。無情な物を有情化した上、更にこれを有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと熟語されて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲はその光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。また雪は氷潔一點の塵のないことから、冷たい嚴

(一)國學者の稿氏
通稱長之輔
武藏の人
書類從の編者
文政四年(二
四八一年)歿
年七十六
逸事



三のそ (筆 郵青田前) 花 雪 月

肅なところを見て、潔白な精神や節操の動かないことを聯想する。花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散りゆくのを惜しんで、節義の士が身命を擲つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の徳を備へてゐるやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つたそのまゝを我等は承繼いで、我等もさう感ずるのである。月雪花を觀賞し得る我等は幸福である。盲人の學者保己一の逸事として傳はつてゐる話に、

(一)紫宸殿のこと。

或時月に對して、
花ならば探りても見んけふの月
といつた。また京都に上つた時、御所の南殿(一)の櫻の花盛と聞
いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな
と戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも

といつた。
なかなかよしや雪のふじのね

月雪花の眺を恣にすることのできない民族は不幸であ
る。月雪花があつても、これに附加された傳説を有しない民

品性
髣髴
心眼

族もまた人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來
の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ること
ができる。月雪花を通じて、我が國民の歴史は髣髴はうふつとして眼
前に浮かぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見な
かつたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

改新帝國讀本 卷一終

此書は、改新帝國讀本の第一巻を終了する。この巻は、改新の精神を述べ、その意義を明らかにし、その方法を論じてゐる。この巻は、改新の精神を述べ、その意義を明らかにし、その方法を論じてゐる。この巻は、改新の精神を述べ、その意義を明らかにし、その方法を論じてゐる。

昭和四年九月二十三日印刷
 昭和五年二月二十五日訂正再版印刷
 昭和五年二月八日訂正再版發行

改新帝國讀本 奧附

定價	
卷一、二	各金四拾五錢
卷三、四	各金四拾參錢
卷五、六	各金四拾壹錢
卷七、八	各金四拾壹錢
卷九	參拾五錢
卷十	參拾參錢

昭和五年臨時定價	
卷一、二	各金七拾參錢
卷三、四	各金七拾七錢
卷五、六	各金六拾七錢
卷七、八	各金六拾七錢
卷九	金五拾七錢
卷十	金五拾四錢

編者 芳賀矢一
 訂補者 上田萬年
 同 長谷川福平
 發行者 東京市神田區通神保町九番地
 代表者 坂本嘉治馬房



發行所

東京市神田區通神保町九番地
 會社資 富山房

電話九段一九三—一九五番
 振替口座東京五〇一番

印刷所 富山房印刷部

